中の池遺跡発掘調査概要

—香川県丸亀市金倉町所在の
弥生時代遺跡の調査—

1982年 3 月

丸亀市教育委員会

環　濠　SD8105（北から）

環　濠　SD8105（東南から）

序　　文

丸亀市の南西部にあたる金倉町中ノ池地区には，弥生前期から中期に至る時期の集落遺跡があり，多度津町三井遺跡や善通寺市五条遺跡など周辺の弥生遺跡との関連の上からもその重要性は大きいといわれております。

この中ノ池遺跡の発掘調査を昭和56年度におきまして香川県教育委員会の御指導と御協力を得て，中ノ池住居跡緊急確認調査として実施いたしました。

この調査では表土下約１m，幅３mから４m程の黒褐色粘土質の堆積した溝状部が３個所で認められ，その中からは土器，サヌカイト製石器，動物の歯片などが出土し，その西側には住居跡と認められるものが発見されました。これらは測量記録，写真記録の上，埋戻しを行ない調査を終了しました。

発掘調査の結果，多数の遺物が出土したことは，今後の埋蔵文化財の研究資料として貴重な役割を果たすものと確信いたしますとともに，この報告書が埋蔵文化財研究のための資料の一助となりますれば幸いであります。

おわりにのぞみ，この発掘調査にあたり御指導と御協力をいただきました香川県教育委員会ならびに地元関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。

昭和57年３月

丸亀市教育委員会
教育長　井　澤　　滋

例　　言

1. 本書は丸亀市教育委員会が，国・県の補助金を受けて実施した中の池遺跡の発掘調査概報である。
2. 調査は丸亀市教育委員会が事業主体となり，調査の実施にあたっては香川県教育委員会文化行政課藤好史郎が担当した。
3. 本書の作成作業において，執筆・実測・遺物写真は藤好が担当し，実測図のトレース・遺物一覧表・構成図等の作成に安藤　一氏の協力を得た。
4. 本書の編集は藤好が行った。
5. 調査に際して，作業員として参加された丸亀市・善通寺市の方々また調査・整理期間中を通して助言をいただいた宮武　進氏，文化行政課他の諸氏にお礼を申し上げたい。

〈本　文　目　次〉

Ⅰ　調査の概要と経過 …… 7

1　調査の概要 …… 7

2　調査の経過 …… 9

Ⅱ　遺　　構 …… 11

1　溝ＳＤ８１０１ …… 11

2　溝ＳＤ８１０２ …… 11

3　溝ＳＤ８１０５ …… 11

4　他の遺構 …… 14

Ⅲ　遺　　物 …… 18

1　ＳＤ８１０１出土土器 …… 18

2　ＳＤ８１０５出土土器 …… 19

Ⅳ　まとめにかえて …… 24

〈図　版　目　次〉

図版１　中の池遺跡（西方・天霧山から）…… 35
C・D列（西から）…… 35
6列（北から）…… 35
図版２　１０列（北から）…… 36
１０列（南から）…… 36
H列（東から）…… 36
図版３　ＳＤ８１０１（北西から）…… 37
ＳＤ８１０１・Ｄ８・配石遺構全景（北西から）…… 37
ＳＤ８１０１・Ｄ８・配石遺構内壷出土状況（北東から）…… 37
図版４　ＳＤ８１０１・Ｄ８・土層断面（北西から）…… 38
ＳＤ８１０２（南東から）…… 38
ＳＤ８１０２・Ｄ１０・蛤刃石斧出土状況（北から）…… 38
図版５　ＳＤ８１０５・Ｃ５～Ｅ７（北西から）…… 39
ＳＤ８１０５・Ｃ５～Ｅ７（北北西から）…… 39
ＳＤ８１０５・Ｃ５～Ｅ７（東から）…… 39
図版６　ＳＤ８１０５・Ｄ６・土層断面（南東から）…… 40
ＳＤ８１０５・Ｇ１０（南東から）…… 40
ＳＤ８１０５・Ｇ１０・土層断面（南南東から）…… 40
図版７　ＳＤ８１０５・Ｅ７・遺物出土状況（北西から）…… 41
ＳＤ８１０５・Ｃ５・壷出土状況（東から）…… 41
ＳＤ８１０５・Ｄ６・壷出土状況（北から）…… 41
ＳＤ８１０５・Ｅ７・獣下がく骨出土状況…… 41
図版８　ＳＤ８１０５・Ｇ１０・礫群検出状況（南東から）…… 42
ＳＤ８１０５・Ｈ１０・甕出土状況（西から）…… 42
ＳＤ８１０５・Ｇ１０・土器出土状況（東から）…… 42
図版９　Ｅ６・Ｆ６ピット群（南東から）…… 43
Ｅ６・Ｆ６ピット群（東から）…… 43

Ｆ６・ＳＫ８１２５遺物出土状況（北東から）…… 43
図版１０　Ｈ５・6,Ｉ６ 土壙群（南東から）…… 44
Ｈ５・6,Ｉ６ 土壙群遺物出土状況(東から)…… 44
Ｈ５・6,Ｉ６ 土壙群完掘後（北から）…… 44
図版１１　ＳＤ８１０４完掘前（南東から）…… 45
ＳＤ８１０４完掘後（北西から）…… 45
ＳＤ８１０１発掘風景（南東から）…… 45
図版１２　ＳＤ８１０１上層出土土器 …… 46
図版１３　ＳＤ８１０１上層出土土器 …… 47
図版１４　ＳＤ８１０２，０３，０４及び土壙出土土器 …… 48
図版１５　ＳＤ８１０５上層出土土器 …… 49
図版１６　ＳＤ８１０５上層出土土器 …… 50
図版１７　ＳＤ８１０５上層出土土器 …… 51
図版１８　ＳＤ８１０５上層，中層出土土器 …… 52
図版１９　ＳＤ８１０５出土土器，ＳＤ８１０１出土石器 …… 53
図版２０　ＳＤ８１０２，０４，０５出土石器 …… 54
図版２１　ＳＤ８１０５出土石器 …… 55

〈 挿　図　目　次 〉

第１図　中の池遺跡の位置 …… 7
第２図　昭和５１年度，５６年度調査区及び遺構配置図 …… 8
第３図　調査区北部遺構実測図 …… 12
第４図　調査区南部遺構実測図 …… 13
第５図　調査区西部遺構実測図 …… 14
第６図　溝断面土層図 …… 16
第７図　ＳＤ８１０１上層部配石遺構実測図 …… 16
第８図　甕口縁形態別構成比図 …… 21
第９図　甕口縁形態別構成比図 …… 21
第１０図　甕口縁形態別構成比図 …… 21
第１１図　甕口縁形態別構成比図 …… 21
第１２図　甕沈線条数構成比図 …… 22
第１３図　ＳＤ８１０１出土土器実測図 …… 26
第１４図　ＳＤ８１０１出土土器実測図 …… 27
第１５図　ＳＤ８１０５出土土器実測図 …… 28
第１６図　ＳＤ８１０５出土土器実測図 …… 29
第１７図　ＳＤ８１０５出土土器実測図 …… 30
第１８図　ＳＤ８１０５出土土器実測図 …… 31
第１９図　ＳＤ８１０５出土土器実測図 …… 32
第２０図　ＳＤ８１０５出土土器実測図 …… 33
第２１図　ＳＤ８１０５出土土器実測図 …… 34

〈 表　目　次 〉

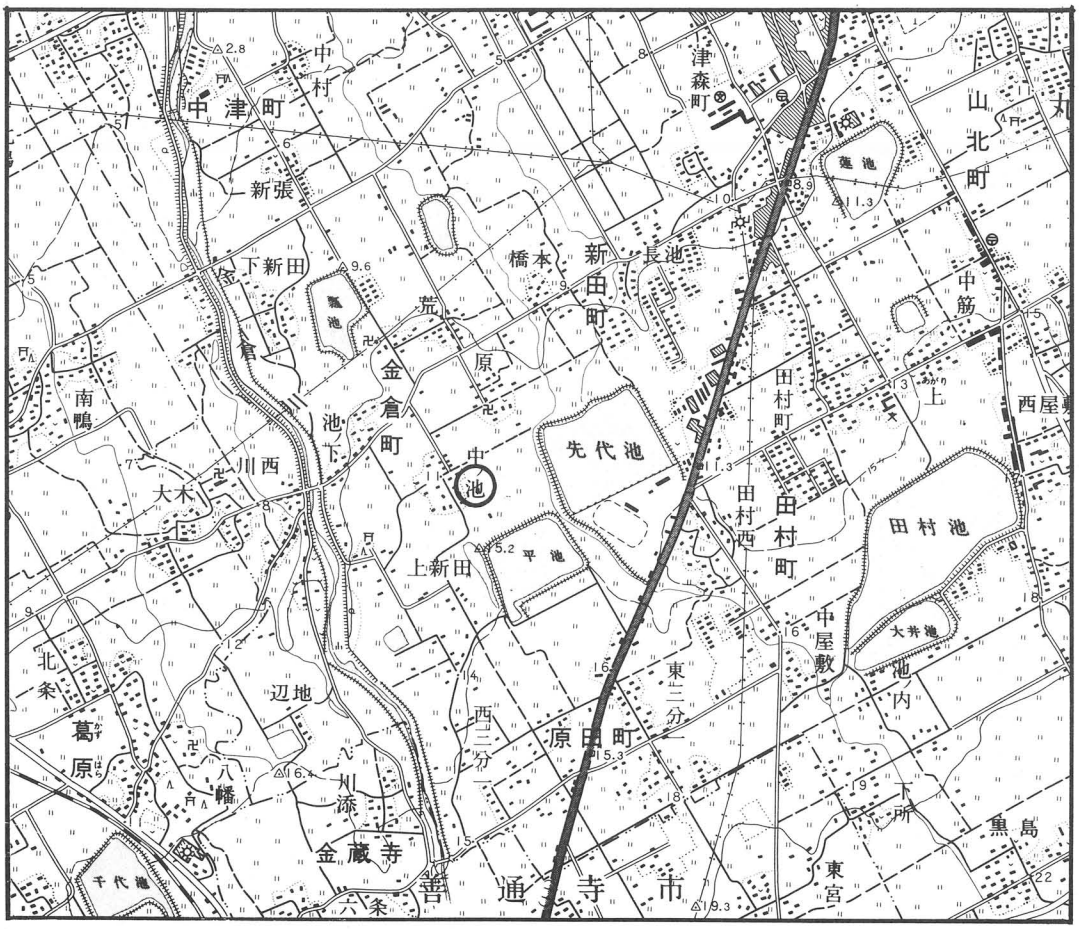
表 1.　土器観察表（i） …… 57
表 2.　土器観察表（ii） …… 58
表 3.　土器観察表（iii） …… 59

I. 調 査 の 概 要 と 経 過

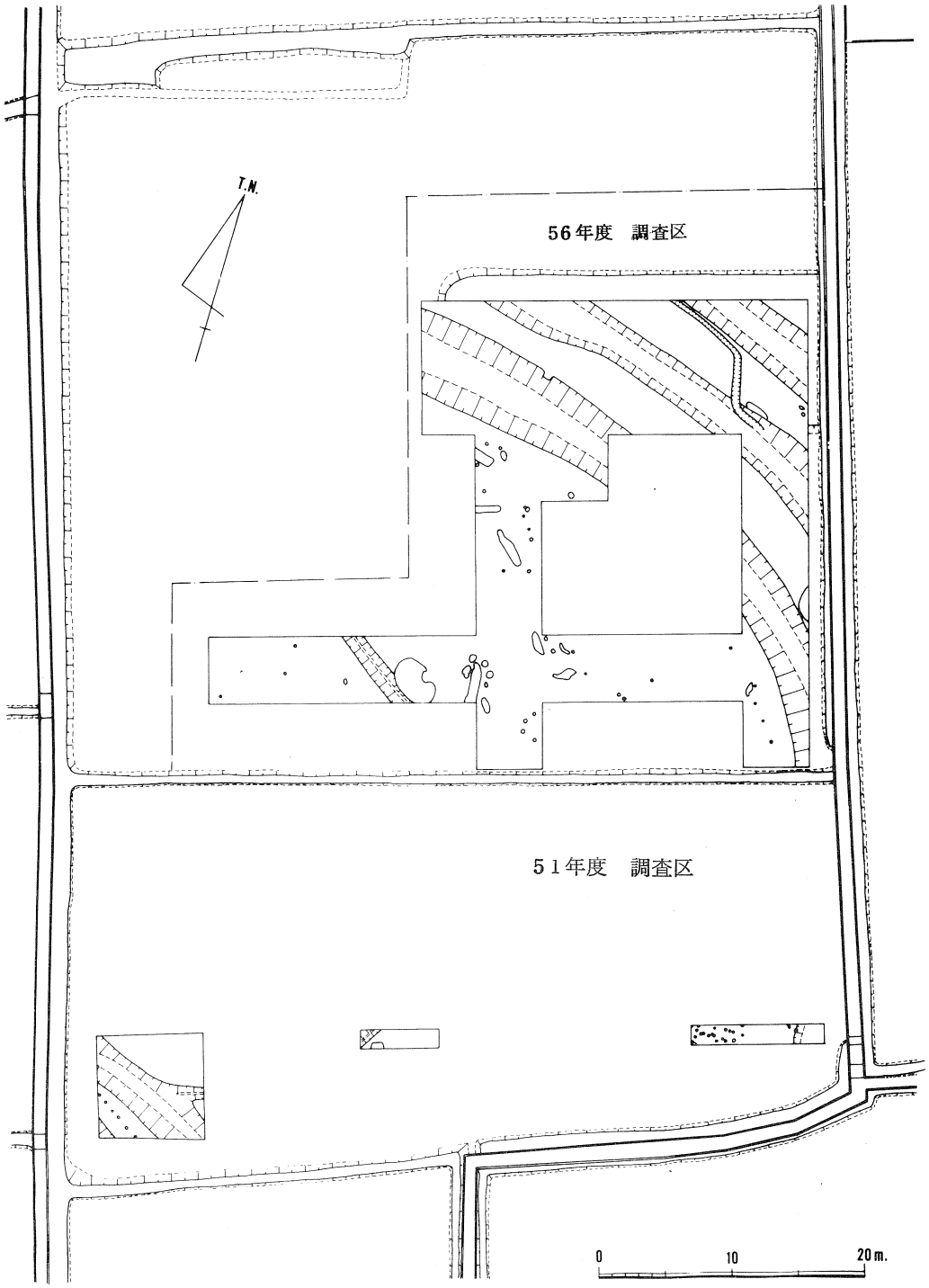
1. 調査の概要

中の池遺跡は主に土器川，金倉川の河川によって形成された丸亀平野の中央部北寄りに位置する。標高は10ｍ前後を計る。近くには同じ弥生前期の遺跡として善通寺市五条遺跡，多度津町三井遺跡などがあり，いずれもほぼ同様な立地を示す。

中の池遺跡は昭和51年度に一部確認調査を実施しており，今回の調査対象地は51年度調査地区のすぐ北に位置し，丸亀市金倉町 994 番地に所在する。現状は水田である。昭和51年度に実施した調査により，遺跡は弥生時代前期に属する遺跡で環濠を有する集落遺跡である可能性が考えられてきた。遺跡の周辺は水田が多く，旧状を残している。しかしこの地域は良質の粘土を産することから陶器の素材として採土による破壊や道路，住宅の建設等による開発が行われる可能性があり，遺跡の内容・範囲などを確認する必要が生じ，今回の発掘調査を実施することとなった。



第１図　　中の池遺跡の位置



第2図　　昭和51年度，56年度調査区及び遺構配置図

今回の発掘調査は対象面積1,675㎡を計り，実質発掘面積は700㎡である。まず前回の調査から距離を隔てた調査区の北部を面積的に広く調査した。その後，南に調査区を拡張し，昭和51年度調査との関連究明を計った。前回の調査で環濠の可能性がある溝が検出されたが，今回も調査区の南東部から北西部にかけて幅5m前後，深さ1m弱の大規模な溝が3本検出された。3本の溝は4m程の間隔をおいて，ゆるやかな孤を描いて平行して走る。その孤の中心は調査区の南西部にある。環濠と考えられ，内部からは多量の遺跡が出土した。中央を走る溝の最上部からは配石遺構が検出され，内部に完形の壷が置かれたような状況で出土した。両側を走る溝は内部に他とは異なる施設があるなど，集落の周囲にめぐらされたと考えられる環濠の性格の解明の一助となる大きな成果があげられた。

環濠の南西部は集落の内部と考えられ住居跡等の検出の期待があったが，調査以前に行われた地下げで遺構の残存状況は良くなかったが，住居跡と考えることもできる遺構や柵列が検出されるなど集落の構造等を解明するうえでは大きな成果があったと言えよう。

2. 調査の経過

調査期間中の作業の要点を進行順に記述する。

8月31日　プレハブ建設。

9月4日　発掘調査開始。5m方眼のメッシュで杭打ち。東西方向…西より1, 2, 3, …，南北方向…北よりA，B，C，…。グリッド名は西北隅の杭No.で称する。物品搬入。

3日　C列より発掘開始。

7日　SD8101の上面確認。

22日　D列の発掘開始。

25日　D列の遺構面検出作業でC列の三本の溝のつづきの部分が判明。ただ，いたるところに現代の攪乱部がある。

28日　SP8101, SD8101, SD8103の切り合いを検出。

現場発掘作業と雨天には整理作業を実施。

10月2日　SD8105のD－6・D－7において上層部発掘作業。

5日　SD8105のD－6で阿方式壷口縁を検出。

12日　SD8105のD－6・D－7で溝の底に畦状の地山の盛り上がりを検出。10月に入って稲の収穫作業などとの兼ね合いで，作業員が極端に減少する。

15日　SD8101のD－8の上層部において配石遺構と完形の壷が検出される。祭祇の可能性が考えられる。

20日　H列の耕作土除去作業にかかる。

27日　G－10でSD8105のつづきの部分の上面を検出。

上記（9月）

11月4日　SD8105のG－10において礫の出土状況の写真撮影。

7日　H２～５の現代攪乱部の除去作業。D列よりも南部では，粘土採取等のためかなりの地下げが過去に行われていることが判明。調査員が１人のため写真・実測などに追われる。

17日　SD8105のG－10においても溝の断面は階段状を呈し，底にはD－6・7で検出された畦状の地山の盛り上がりが部分的に存在することが判明。

30日　SD8105は特にD－6・7において他の溝とは様相を異にするため，E－7に発掘区を拡張する。それと同時にC－5・D－5にも調査区を拡張。

今月になり善通寺からの作業員を導入。

12月3日　C－5・D－5の拡張区で猪と考えられる獣骨の歯及び下顎骨が出土。E－7の灰褐色土層から炭化米が出土。（いずれもSD8105）

4日　SD8105のD－5～E－7において底の南部に柵列と考えられる小ピット群が30cm程度の間隔で検出される。

7日　本日より丸亀市の運動公園内のプールを使っての遺物の整理作業を，現場作業と併行して実施。C・D列他の遺構の実測・写真に追われる。

23日　午前中に調査区周辺の地形測量が完了し，午後坂出の事務所へ物品の搬出作業を行い，現場作業終了。以後整理作業。

1月14日　発掘現場の埋め戻し作業。

2月3日　丸亀市での整理期間が終了し，県庁へ引き上げる。

Ⅱ. 遺　構

調査区の東南区の東南部から西北部にかけて環濠と考えられる３本の規模の大きな溝が走り，その南西部において土器や炭化物を含む土 壙 や柱穴と考えられるピット及び小規模の溝が検出された。調査を北部のＣ・Ｄ列以外はすでにかなりの地下が以前行われており遺構の残存度は良くない。

1. 溝SD8101

環濠と考えられる３本の溝の中で，中央を走る溝である。幅４ｍ，深さ 0.7 ｍ前後を計る。約25ｍの長さで検出した。東部は以前の地下げで，遺構上面より10 cm 程削平されている。他の環濠と考えられる溝とは異なり，「Ｕ」字形の上部が大きく開く単純な断面形を呈している。溝は東南部よりも西北部がやや低く，西北端で一段深くなっている。

溝の埋土は，西北端の一段深くなった部分の最下部でうすく堆積した細砂層が検出された以外，有機分を含んだ暗い色調の粘質土である。埋土中で砂質の発達が認められないことから，溝はおだやかな状況で埋没していったことがうかがわれる。

溝中央部Ｄ－８・９区において配石遺溝を検出した（第７図）。溝がかなり埋没し当初の規模から著しく浅くかつ狭くなった段階で，西岸を中心に拳大の河川礫を敷きつめるように配している。配石遺構の中央部で，完形の壷を検出した。溝が廃棄されるのに伴う祭祇遺構と考えられる。

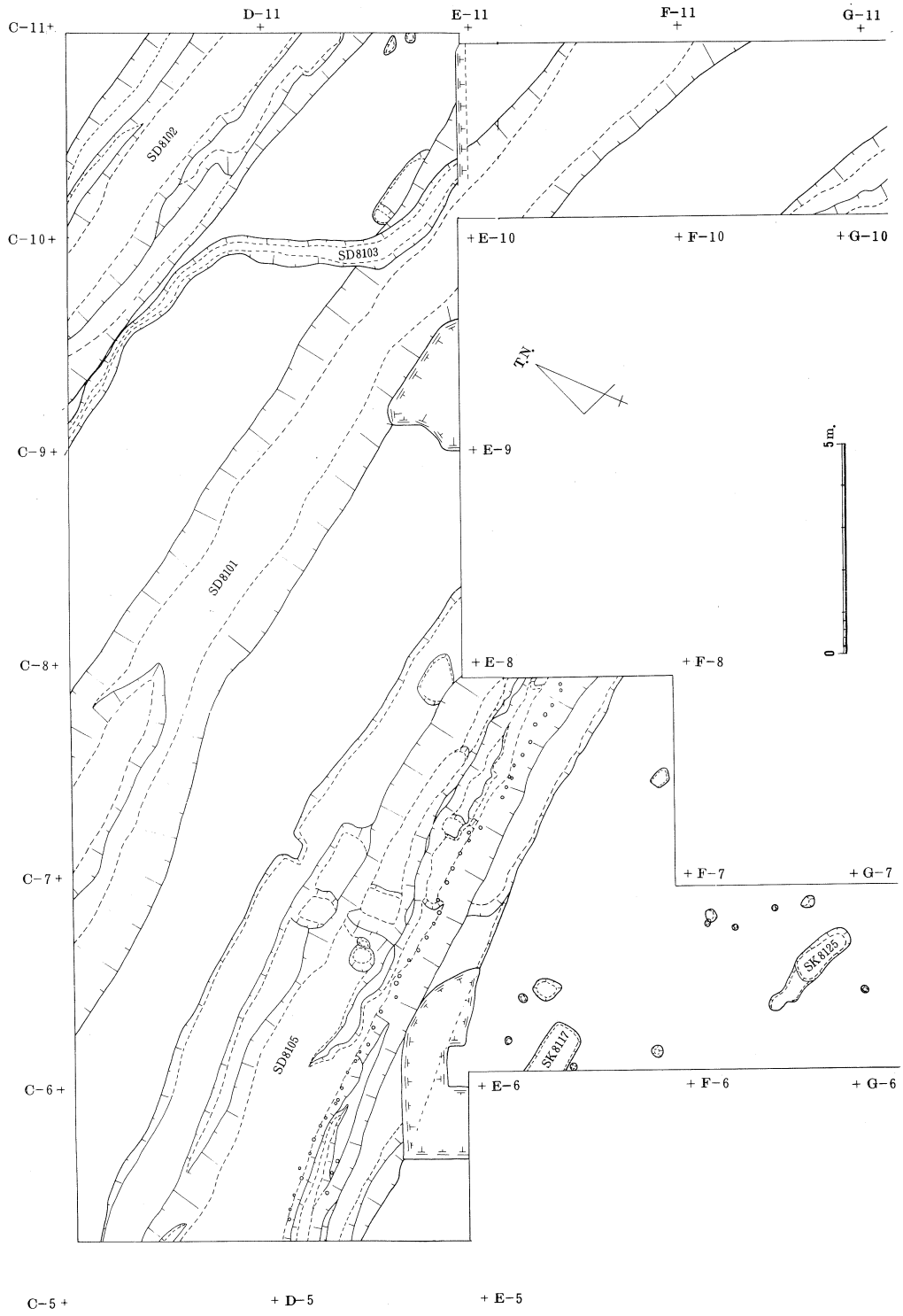
2. 溝SD8102

調査区の東北端で一部検出した溝である。３本の環濠と考えられる溝の中で東側に位置するものである。幅 4.5 ｍ，深さ 0.8 ｍ前後を計る。約９ｍの長さを検出した。中央の溝ＳＤ8101とは４ｍ程隔っている。

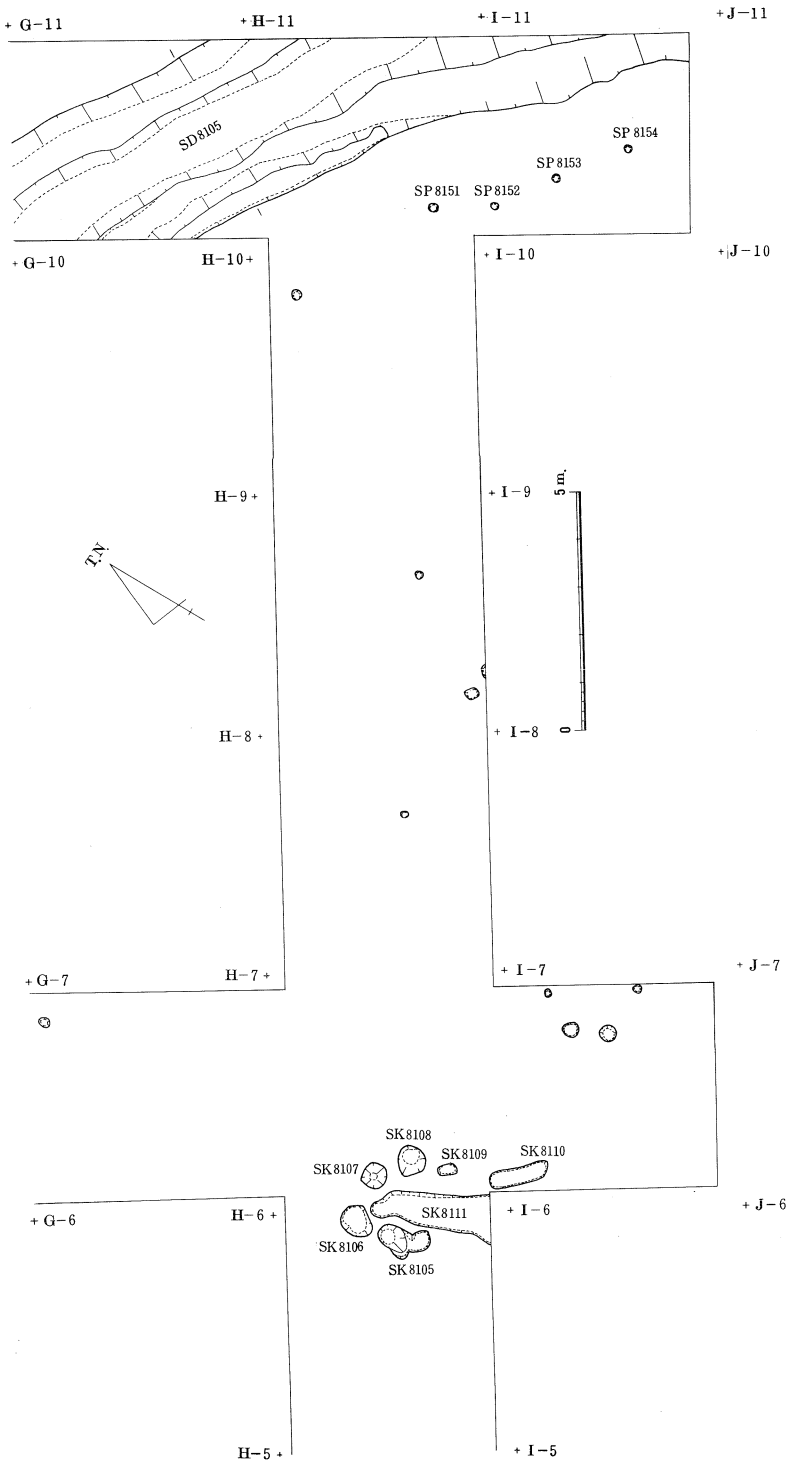
最下部にわずかに砂を含むが，他は有機分を含んだ暗い色調を呈する粘質土が埋土となっている。静かな埋没状況がうかがわれる。

3. 溝SD8105

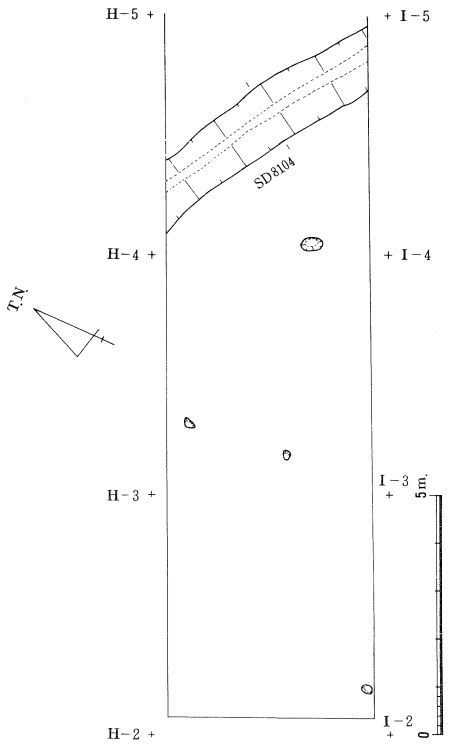
環濠と考えられる３本の溝の中で西に位置し，最も広い範囲で確認した。調査の東南部から西北部へとゆるやかなカーブを描く。地下げのためＣ・Ｄ列以外は遺構面より 10cm 程削平され，Ｄ列も一部攪乱を受けている。残存状況の良い箇所で幅 6.5ｍ，深さ 0.8ｍ程を計る。溝は西北部が東南部より 10cm 程深くなっている。 溝の断面は階段状を呈している。側面に平担部があり，基本的に２段になっているが，Ｄ－６区を中心として溝の北側面にさらに長さ11ｍ程にわたって平



第3図　　調査区北部遺構実測図



第４図　　調査区南部遺構実測図



第５図　　調査区西部遺構実測図

坦面が削出されている。そのためＤ－６区の溝北側面は３段になって底に連なる。

溝の底部には地山である黄褐色砂質土層を削り出すことで形成された畦状の高まりが設けられている。一部未調査の区画があるが，この畦状の高まりはＧ－10区からＤ－６区まで溝の底中央部を走る。Ｄ－６区で分起し，溝北側面の下位平坦面の東部の凹みにつながる。畦状の高まりが位置するＤ－６区の溝の底は他よりさらに20～30㎝程深くなっている。

畦状の高まりと一段深くなった溝の底部は留水を区画するための施設で、対応する４段になった溝の側面は区画された溝底に降りる施設としての機能を有するものとも考えられる。

Ｄ－５区からＥ－７区にかけて底面南部に，30～40㎝程の間隔で並ぶ小穴を検出した。溝の側面が安定した土層からなっていることや，畦状の高まりと対応する部分が多いこと及び集落内部側と考えられる配置から柵列になる可能性が高い。

4. 他の遺構

今回の調査区ではSD8105より西に，環濠と考えられるような規模を有する溝は存在しない。51年度調査結果を考慮すればSD8105の南西部が環濠に囲まれた区域にあたると考えられる。事実多数の土壙が検出されたが、すでに削平を受けており遺構の残存状況は良くない。

SK8117 Ｅ－６区において検出した 土壙 で，短軸75cm,長軸は現状で1.2cmを計る隅丸の長方形を呈する。削平のため上部が消失しており，現状で5cm程の深さを計る。土器片と炭化物の細粒を多く含む。周辺に柱穴と考えられる 土壙 がある。

SK8125 Ｆ－６区において検出した 土壙 である。短軸65cm， 長軸2.5 m を計る。削平のため特に西部は著しく旧状を損っている。土器片と炭化部の細粒を多く含む。周囲に柱穴状の土壙がある。

ＳＫ8105～SK8110 Ｈ－５・６，Ｉ－６区で検出した 土壙 で土器片と炭化物の細粒を含む。

SK8110は隅丸長方形状を呈するが，他は円形のものである。削平のためいずれも遺構上面は消失している。

SK8152～SK8154 I－10区で検出した直径10 cm程の土壙で1.5 m程の間隔で一方向に並ぶ。大半は削平されていると考えられる非常に浅いものである。柵列になる可能性が高い。

SD8105 H－4区で検出した溝である。断面は上部が開いた台形状を呈する。上面幅1 m，底面幅10 cm，深さ70 cm程を計る。他の遺構と異なり地山と同様な黄褐色の砂質土が埋土のかなりの部分を占め人為的に埋められた可能性が高い。

調査区の東南部から北西部にかけて検出した3本の溝はいずれも規模が大きく，カーブを描いて平行に走る。昭和51年度調査区において検出された溝もほぼ同規模のものであり，今回検出した溝と関連しあって集落の周囲をめぐる環濠となる可能性が高い。3本の環濠と考えられる溝はその間隔も等しく平行に走る。互いを意識した配置とすることができ，それほどの時間差があるとは考えにくい。

しかし各溝から出土した遺物には時期差が認められる。先後関係をまとめれば次のようになる。

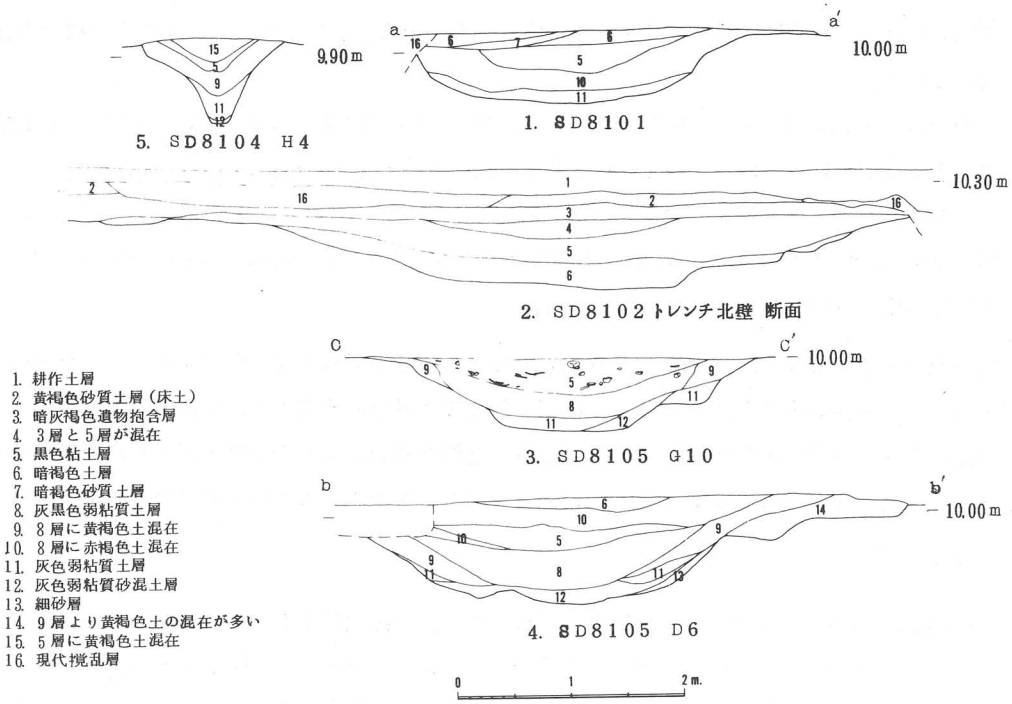
SD8101 → SD8102 → SD8105

SD8101には溝の排棄に伴う祭祀が行われたと思える配石遺構があることも考え合わせると，古い溝が完全に埋没する前に前記の順で新たに溝が掘られたのであろう。

各溝にはその形態において差異が認められる。SD8101が上部の大きく開いた「U」字形の断面形を呈するのに対して，時期的に後出するSD8102，SD8105は階段状の断面を呈する。時にSD8105は底部に溜水を区画するような施設をもち，それと対応するように断面が階段状を呈している。溝内へ進入する施設となる可能性も考えられる。またSD8105の底の南寄りには杭列もしくは柵列と考えられる小ピットが並ぶ。これらは環濠の機能などを考える上で重要なものである。

環濠の南西部は削平により大半の遺構が上部を消失した状況で検出された。SK8117やSK8125などのように炭化物の粒子と土器小片を多く含むやや大きめの長方形の土壙を検出したが，周囲に柱穴状のピットが配置されているものもあり住居跡の上部が消失したものと考えられる。またSD8104以西には住居跡と考えられる遺構は検出できなかったが、付近の現状から旧地形は南西部の方が標高はやや高かったと推定され，削平により遺構の残存度がより悪いことも充分考えられる。

遺構の解説の都合上，すでに一部述べたが，改めて昭和51年度の調査成果と今回の調査結果の関連について記述したい。51年度調査地区は今回調査した地区のすぐ南に接しており，現状は水田である。調査区が3ケ所設定された。西に位置する調査区から規模の大きな溝が2本南東から北西の方向を有して検出され，東に位置する調査区からは溝の一部と考えられる遺構が検出されている。東の調査区の遺構はSX7601と称され，大きく西にカーブして，今回のSD8105に連なる。西の調査区の溝も規模と複数平行して走ることなどから今回の3本の環濠のいずれかと関連する可能性がある。今回の調査においてH－10区でSD8105が検出され，H－9区からH－2区までの約40 mの間は環濠は存在しない。51年度調査の西調査区の溝とE－7区のSD8105はほぼ平行する。その間隔は60



1. 耕作土層
2. 黄褐色砂質土層（床土）
3. 暗灰褐色遺物抱含層
4. 3層と5層が混在
5. 黒色粘土層
6. 暗褐色土層
7. 暗褐色砂質土層
8. 灰黒色弱粘質土層
9. 8層に黄褐色土混在
10. 8層に赤褐色土混在
11. 灰色弱粘質土層
12. 灰色弱粘質砂混土層
13. 細砂層
14. 9層より黄褐色土の混在が多い
15. 5層に黄褐色土混在
16. 現代撹乱層

第6図　溝断面土層図

第7図　SD8101上層部配石遺構実測図

m弱を計る。今回の調査地区で最も西に位置するのがH－2区で，51年度の西調査区のSD7601とは直線距離で24m程離れており，その間は未調査であるが，現状では南北間約60mを計る環濠集落である可能性が高い。東西方向の規模は未調査のため不明である。

Ⅲ. 遺　物

今回の調査区で遺物が量的にまとまって出さした遺構は調査区の北部から東部において検出した環濠と考えられる3本の溝である。他の 土 壙 などの遺構から出した遺物は量的にも少く，残存状況も良くない。環濠の中で最も古い時期と考えられるSD8101と検出した面積も広く，遺物量も多いSD8105から出土した土器を中心に報告したい。

1. SD8101出土土器

SD8101は3本の環濠と考えられる溝の中央を走るものである。溝中の埋土は暗褐色～黒色の粘質土であり，北部の一段深くなった部分の最下部以外では砂層は認められない。遺物の包含状況，土層からみてそれほど明瞭に分層できず，調査区の北部で砂層とその上層に分層して遺物を取り上げた。

壷形土器（第13図）

1・2，頸部に接合時の段を残すものである。1は段の部分をヘラにより整え，2は段の上位にヘラによる浅い沈線を1条めぐらせるものである。3～6，削り出し突帯を頸部にもつものである。3は口縁端部に1条のヘラによる沈線がめぐる点で1の段を有する土器と共通している。5はやや口頸部が外反気味に発達し，耳状の2孔を有する貼付けの突起がつく。突帯の残りが悪い3をのぞき，いずれも突帯部は内傾し，それほど長頸化はしていない。7～11，頸部にヘラによる沈線がめぐるもので，沈線数が少いものを除き，沈線部は内傾している。口頸部は発達していない。12，配石遺構内で検出したほぼ完形の壷である。爪による刻み目を有する 貼付突帯をもつ。口頸部は発達し，胴が張り，やや上底気味の底部をもつ。13，肩部と頸部にヘラによる平行沈線が多数走る。頸部の沈線文帯の幅は広く，外反気味のもので口頸部も発達している。14，頸部に貼付突帯をもつ。突帯部は外反しており，長頸のものである。15，口線内面に貼付突帯を有する阿方系の土器である。16，短く外反する口線部をもつ小形の壷で1孔を有する。17～19，胴部の破片である。17は沈線による文様をもつ。連弧文か山形文であろう。

甕形土器（第14図　1～10）

1～6，如意状口縁の甕であり，2～5条のヘラによる平行沈線がめぐる。口縁端部には刻み目がつく。5と6には山形の沈線文が平行沈線間に施される。SD8105で出土した同様の文様をもった甕は貼付口縁であることは注目される。7～9，貼付により，口縁部が形成されている。7，8は口縁上面が水平で，断面形は三角形状を呈する。10，直口の甕で口縁下部に刻み目をもつ貼付突帯を有する。

蓋形土器（第14図　11，12）

11，壷の蓋で，中央部に孔を有する。12，壷の蓋で，中央部はつまみ状になる。

土製品（第14図　13）

13，土製の紡錘車で，円板状を呈する。中央部に焼成前の穿孔を有する。

2. SD8105出土土器

SD8105は3本の環濠と考えられる溝の中で西に位置するものである。埋土は有機分を含んだ粘質土層であるが，色調により3層に大別できる。3層に分層して検出した遺物の中で，上層と中層の遺物を報告する。

中層出土土器

第6図のSD8105の土層中の第8・9層が中心となる。

壷形土器（第15図，第16図1～7）

第15図　1，頸部に接合痕の段を残すもので口縁部は短く外反する。2・3，削り出し突帯を有する。頸に施された削り出し突帯部は内傾・直立気味で，口頸部は発達している。4～6，頸部にヘラによる平行沈線を有する。口頸部が短く外反するもの（5）と大きく開くもの（4・6）がある。7，無文の壷であるが，体部に比して口頸部が発達し，長頸化している。

第16図　1～3，内面に貼付突帯を有する阿方系の壷である。いずれも口頸部がかなり発達しており，1では頸部に12条のヘラによる沈線が走り，沈線部は外反する。4～7，貼付突帯を頸部外面に有する。いずれもかなり長頸化している。

甕形土器（第16図　8～11）

8・9，如意状口縁の甕である。10，上面が平担な貼付口縁の甕である。11，口縁端部のやや下位に刻み目を有した貼付突帯を有する。

高杯形土器（第16図　12）

内外面ともに剝落が著しく，口縁端部は短く外反する。

上層出土土器

第6図のSD8105の土層の中で第5層より上部から出土したものである。

壷形土器（第17・18・19図）

第17図　1，頸部に削り出し突帯を有し，2孔を有する耳状の貼付突起がつく。2～5，頸部外面にヘラによる平行沈線を有するものである。内傾する沈線部を有し，大きく外反する短い口縁を有するもの（2），沈線数も少く，長頸化もそれほど認められない古手のもの（4）と長頸化したもの（3），多状の沈線を有するもの（5）がある。

第18図　1～4，頸部外面のヘラによる沈線の多条化と沈線帯の外反化が進んだものである。5，口縁端部が肥厚化するもの。6・7，無文の面で，長頸化したもの（6）がある。8～11，口縁内面に貼付突端を有する阿方系のもので，突帯が渦巻状に文様化したもの（8），外面に沈線だけでなく貼付突帯がつくもの（9，11）があり，いずれも口縁部の発達と長頸化が認められる。12・13，頸部に貼付突帯をもつ壷であり，器形は類似している。13は肩部にヘラによる平行

沈線がめぐる。

第19図　1～7，いずれも貼付突帯を有する壷である。頸部は長頸化している。2は突帯を貼付する前に沈線をめぐらせ，7は突帯間にも沈線を施す。8，胴下部に焼成後の2穿孔を有する壷で頸部と胴部間に接合時の段を残す。他と異なり胎土に黒色の光耀を有する鉱物粒を含む。

甕形土器（第20図，第21図　1～7）

第20図　1～6，如意状の口縁を呈する甕で，ヘラによる平行な沈線をもつ。7～11，上面が平担な貼付口縁をもち，無文のもの（6）をのぞき沈線数も多い。山形文を有する甕がSD8101では如意状口縁であったのに対して，SD8105では貼付口縁であることは注目される。12，口縁端部が下った断面三角形の貼付口縁のものである。

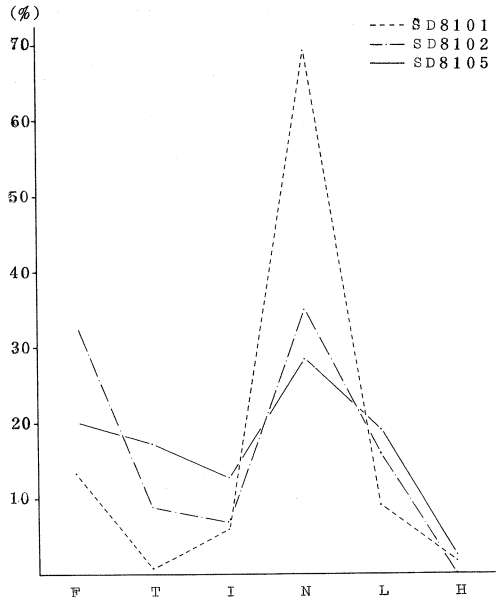
第21図　1～4，口縁端部が下った断面三角形の貼付口縁の甕である。施された沈線はヘラによっている。5・6，櫛状の器具で数状を単位とした平行沈線文を有する貼付口縁の甕である。6は4条の櫛状の器具を用いて施文している。7，直立する口縁下部に貼付の突帯を持ち，口縁端を突帯の先端には刻み目を有する。ヘラによる平行沈線を施される。

他の器種（第21図　8～10）

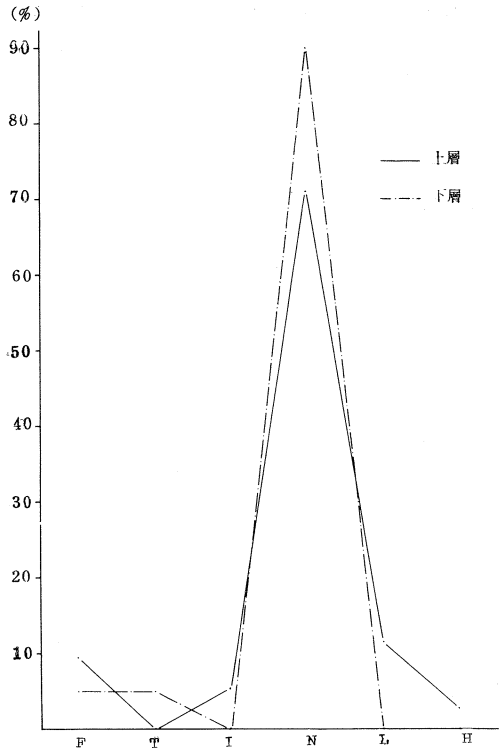
8，高杯の杯部と考えられる。中層で出土したもの（第16図　12）と比較して，口縁部が長く伸びるものである。9，甕の蓋。10，壷の蓋である。

以上遺物量に恵まれたSD8101，SD8105の2本の環濠出土土器を図化した。この2本の溝は今回検出した遺構中最も時期差があるものの一つと考えられる。しかし3本の環濠は同じ方向と間隔及び規模を有しており，それほどの時間差を有しているとは考えられない。また出土した個々の遺物を見れば，遺構を越えて同様な形態を有するものが多く認められるなど共通する様相がある。近接した時期の遺構，遺物の変過の方向性などを明確にするためには，遺構毎の遺物の総体を比較す必要があろう。まず層位的に遺物量に恵まれたSD8105において，遺物の変化の方向性をみてみたい。

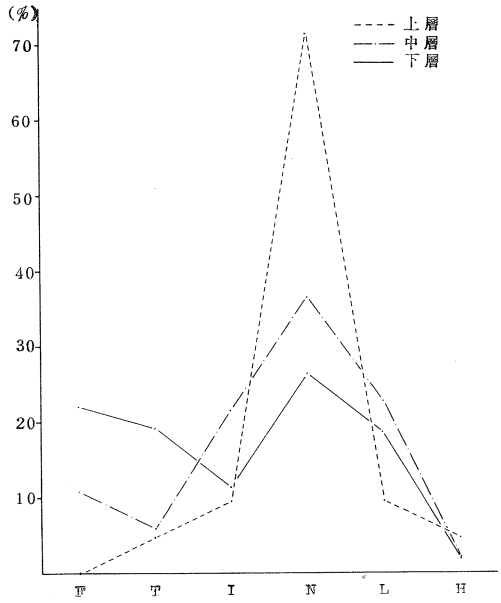
第8～10図は口縁形態の差により，分類した甕の構成比を図化したものである。図中の記号はその形態を示す。N：いわゆる如意状口縁を有するもの。F：貼付口縁で上面が水平になっており，端部で薄くなるもの。L：貼付口縁で上面が水平で基部と端部に厚みの差がないもの。T：貼付口縁で，口縁端部が下っており，断面三角形状のもの。H：直立する口縁で，直下に貼付突帯を有するもの。I：口縁下部が内傾するもの。以上6類に分類した。大別すれば如意状口縁の甕と貼付口縁を基調とする甕となる。貼付口縁のF・L・Tの各形態の中には明確に位置付けにくいものもあり，図中の比率はやや幅を有しており，一つの傾向を示していると考えていただきたい。また出土した土器の大半が破片であるため個体数を正確に割り出すことが問題となる。ここでは数量適正化の方法として，残存度を $x/8$ で表現し，$1/8$を1単位として集計した。口縁部が完全なるものは8単位となる。



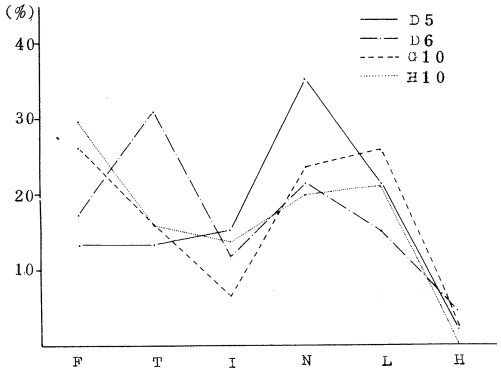
第8図　甕口縁形態別構成比図



第9図　SD8101
甕口縁形態別構成比図



第10図　SD8105
甕口縁形態別構成比図



第11図　SD8105上層
甕口縁形態別構成比図

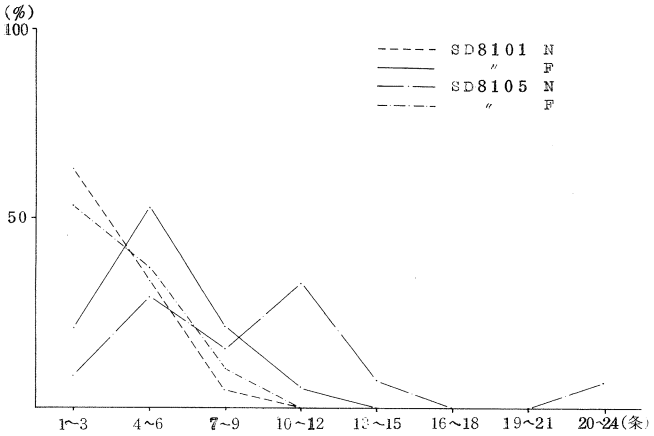
SD8105 は3層に埋土を大別して遺物を取り上げた。第10図は各層位毎の甕の構成比を表している。総単位は1236を数え，155 個体以上の点数となる。下層出土の甕において，如意状口縁を有するものは71％を占めるものに対して，中層においては36％，上層では26％とその比率は小さくなっている。ただ各遺物包含層間には無遺物層は形成されていず，多少の誤差は含まれるが，如意状口縁の甕の激減と貼付口縁の甕の様相の変化の傾向とすることができよう。

第8図は3本の環濠から出土した甕の口縁形態の構成比を図化したものである。SD8101 では如意状口縁を有するものが68％を占めるのに対して，SD8102 では35％，SD8105 では28％を占める。如意状口縁の減少傾向の中で，

ＳＤ８１０１　→　（ＳＤ８１０２）　→　ＳＤ８１０５

の先後関係があるとすることができよう。ただ SD8102 は遺物の量が少なく SD8105 との先後関係は明瞭ではない。ただ如意状口縁の比率が高いことから SD8105 と一部時期的に重なりながらも先行する可能性が高いと考えられる。

SD8101 と SD8105 の間には時期差があることが明らかになった。甕には貼付口縁の比率増加とともに，沈線文の条数の増加傾向が認められる。第12図は如意状口縁と上面が平担な貼付口縁の甕に施された沈線文の条数の変化を図化したものである。如意状口縁と貼付口縁では後者の方が条数が多い。またいずれも SD8101 より SD8105 出土のものの方が沈線文の条数は増加している。特にＳＤ8105 の上層出土の貼付口縁の甕には4～5条を単位とした櫛状の施文具を用いて合計20条以上の沈線文を描くものが出現することや，SD8101 では如意状口縁の甕に施されていたヘラ描沈線による山形文が SD8105 では貼付口縁の甕の文様として用いられるなど新しい時期的特徴が認められる。



第12図　甕沈線条数構成比図

一方，壷においてはＳＤ8101，SD8105のいずれの環濠からも口頸部に段を有するものや削り出し突帯を有するもの，沈線もしくは貼付突帯を有するものなどが出土した。しかし量や質の面で各環濠の置物には差が認められるようである。出現時期が最も古く位置付けられる接合時の段を残す壷は量的に非常に少なく検出した遺構より古い時期の所産である可能性も否定できないが，削り出し突帯へ移行する傾向が認められるものもＳＤ8101から出土している。また大半が口頸部の破片であるのに対して，ＳＤ8105の上層出土のものは胴部から底部にかけて残存するもので，頸部と胴部の土境に接合時の段を残す。他とは異なり胴部下半に焼成後の穿孔を有し，日常土器とは違う様相も認

境に接合時の段を残す。他とは異なり胴部下半に焼成後の穿孔を有し，日常土器とは違う様相も認められる。また胎土も黒色の光沢をもつ鉱物を含むなどの特徴をもつ。

復原作業を完了しておらず器形変化を充分に明らかにできないが，SD8101 から SD8105 の壷は長頸化と口縁部の発達で理解できよう。削り出し突帯を有するものは SD8105 では頸部が直立したものや口縁部が大きく外反するなど新しい様相を呈してくる。沈線文を有するものも SD8101 から SD8105 への変化では長頸化に伴う頸部の直立化と口頸部の外反が認められるが，前出の新しい器形的特徴を有するものも存在するなどの過渡期の相様がうかがわれる。外面に貼付突帯を有する壷は SD8101 では上層に一部認められるだけで非常に限られているのに対して SD8105 では量的に増加する。いずれも頸部は長頸化しているものである。また SD8105 出土の面には突帯を貼付するのに先だって沈線を施すものもある。

壷の長頸化と口縁部の外反に伴い口頸部外面に施される文様帯もその様相が異ってくる。SD8101 出土の壷の口頸部の文様帯は，上層出土の一部のものを除き，上部が内傾もしくは直立する。これに対して SD8105 出土のものは直立または外反しているものが多くなる。削り出し突帯はほとんど上部が内傾しているものに対して，貼付突帯のものは直立もしくは外反している。沈線文のものは両者が認められる。また口縁内部に貼付突帯を有した阿方系の壷も SD8101，SD8105 の両溝から出土しているが，後者から出土したものの方が文様が発達し複雑化している。

また甕・壷以外の土器・土製品として高杯，蓋，紡錘車，土錘などが出土しており器種的にも比較的恵まれている。

今回写真でしか報告できなかったが，石器類もかなりの点数が出土している。器種として石庖丁，石斧，石鏃，石錐，スクレイパー，石鏃もしくは石斧の未成品，凹み石，叩き石及び砥石が出土している。石庖丁には片岩系の石材を用いた磨製のものと，サヌカイト質の打製のものがある。また石斧には蛤刃石斧，柱状片刃石斧，扁平片刃石斧がありいずれも結晶片岩系の石材を用いているのに対して，石鏃もしくは石斧の未成品と考えられるものは硬質の砂岩系の石材を用いている。石鏃，石錐にはサヌカイトが用いられている。

Ⅳ. まとめにかえて

今回の中の池遺跡の発掘調査では環濠と考えられる3本の溝と，溝に囲まれた集落の内部と考えられる区域から多数のピット及び小規模な溝が検出された。調査区の北部は遺構面上に遺物包含層があり，遺構の残存状況は比較的良好であるが，調査区の南部は近現代の地下げによる削平を全面にわたって受けており，遺構の上半部は消失している。おそらく旧地形では南部の方が比高的にも高い地形を呈していたことが考えられる。

検出された3本の環濠と考えられる溝[註1]はいずれも同程度の規模と方向を有しており，また遺物からみても共通する要素を有する土器が各溝から検出されるなど機能的にも時期的にも近接したものであることがうかがわれる。中央を走る環濠を除き東西の環濠はその側面が段をなしており，共通した特徴を有する。また中央の環濠の最上層には完形の土器を伴った配石遺構があり，溝の廃絶に伴う祭祇遺構と考えられる[註2]。出土した遺物の変化の方向性から，中央の環濠（SD8101）から東側の環濠（SD8102），西側の環濠（SD8105）の順序で使用され，埋没したことがうかがわれる。環濠の中でSD8105は最も広い面積で確認した。底部には畦状の削り残しの部分が 溝と平行して走り，留水を区画するための施設とも考えられる。対応するように北東の側面は階段状になっており，西南側の底面には杭列もしくは柵列と考えられる小ピットが30cmの間隔で一列に並んでいる。これら3本の環濠内の堆積には砂層が含まれていず，非常におだやかな堆積状況が推測される。

中の池遺跡の今回の調査成果の一つとして出土した多量の遺物があげられる。遺物の質・量に恵まれた遺構として環濠がある。環濠はその検出状況からしても近接した時期の所産である可能性がうかがわれたが，包含された土器にも近接した様相が認められる。ただ量的に遺物を比較すると器種内における形態毎の占有率の差があり，先後関係が認められる。

甕形土器では如意状口縁のものがSD8101とSD8105の下層では70％程を占めるのに対して，SD8105の上層では25％程に減少する。また特に貼付口縁のものでは口縁直下の外面に施される沈線の多条化の傾向が認められる。10条未満のものがSD8101では95％程を占めるのに対してSD8105では約53％に減少し，特に10～12条のものが5％から33％に増加する。この傾向は如意状口縁のものにも影響を与え，SD8101では3条以下のものが63％ を占めるのに対してSD8105では53％にまで減少する。またSD8105の上層では櫛描沈線文を有した貼付口縁の甕が出土した。4条を単位とした櫛状の施文具で24状の沈線を施す。これはヘラ描沈線の多状化による施文範囲の拡大の結果として出現するのであろう[註3]。

壷形土器ではSD8101，SD8105のいずれの環濠からも成形の際の段を残すもの， 削り出し突帯，ヘラ描沈線，貼付突帯を有するものが出土している。ただ有段のものは量的に非常に少く，いずれも小片である。SD8101からSD8105への移行による壷の変化は長頸化による施文域の拡大ということで理解される。必ずしも削り出し突帯であるからといって古い形態を有していると

は限らず，沈線文を施す壷にも削り出し突帯を有する壷よりも古いプロポーションを有するものがある。しかし沈線文や貼付突帯を右する壷は削り出し突帯の壷より長頸化は進んでいるものが多い。最も新しい時期と考えられるSD8105の上層においても，壷にはまだ櫛を施文原体としては用いておらず，沈線文は全て篦を使用している。口縁部内面に貼付突帯を有する阿方系の壷はSD8101の上層の段階から出現し，SD8105出土のもののように幾重にも渦を巻くなど 文様的に複雑化する傾向を有しているようである。

今回の調査で出土した土器の様相変遷を大きくとらえれば甕における如意状口縁の比率の低下，文様帯の拡大と櫛描文の出現，壷では器形に様々な系譜の存在を推察させるバラエティーが出現することや長頸化に伴う施文域の拡大が認められる。壷ではまだ櫛を用いた沈線文は出現しない。甕において使用されはじめる櫛描文が壷にも遅れて使用されるようになっていくと考えられる。

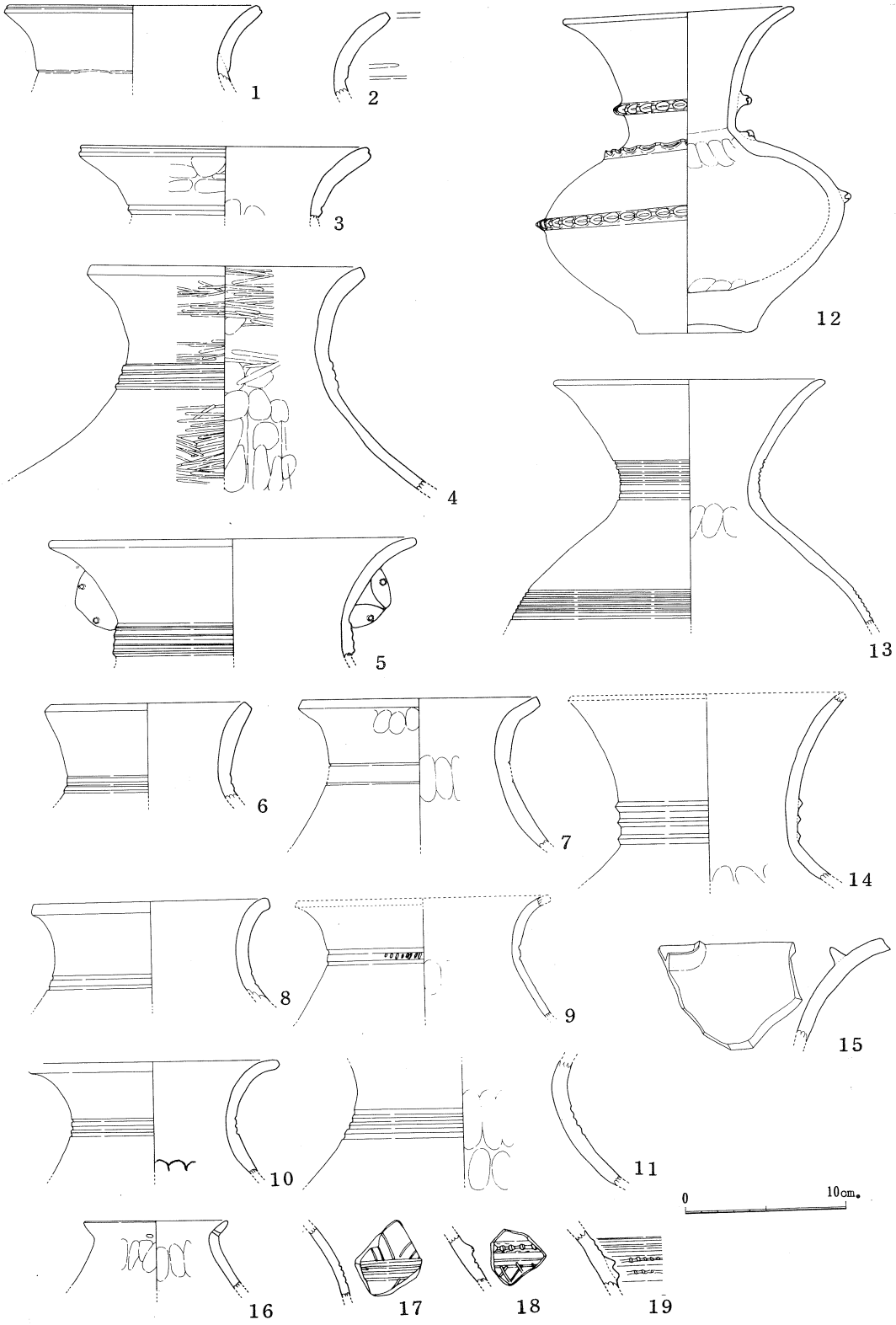
中の池遺跡に代表される県下の内陸部の遺跡においては，壷に成形時の段を残すものが主体を占める時期の遺構や遺跡がまだ認められず，坂出市大浦浜遺跡や観音寺市室本遺跡など島嶼部や後背湿地に恵まれた海岸部の遺跡より後出する時期に比定されるものばかりである。大浦浜遺跡や室本遺跡と中の池に代表される内陸部の弥生前期の遺跡との関係や中の池遺跡・善通寺市五条遺跡・多度津町三井遺跡など前期末[註4]までしか継続しない遺跡群に継く弥生中期の様相などまだ不明な点が多い。そうした讃岐の弥生前期の様相の中で確実に遺構から検出され前期後半から末の時期に編年上の定点を与える好資料である中の池遺跡の有する意義は大きい。

註1　昭和51年度の調査成果と総合して考え合わせると今回の調査区の西南部に中心を有するような楕円形を描いてめぐると考えられる。また溝内の堆積状況は黒色ないしは暗褐色の粘土がほとんどで砂層が形成されていないなど非常におだやかに埋没したことが窮われる。

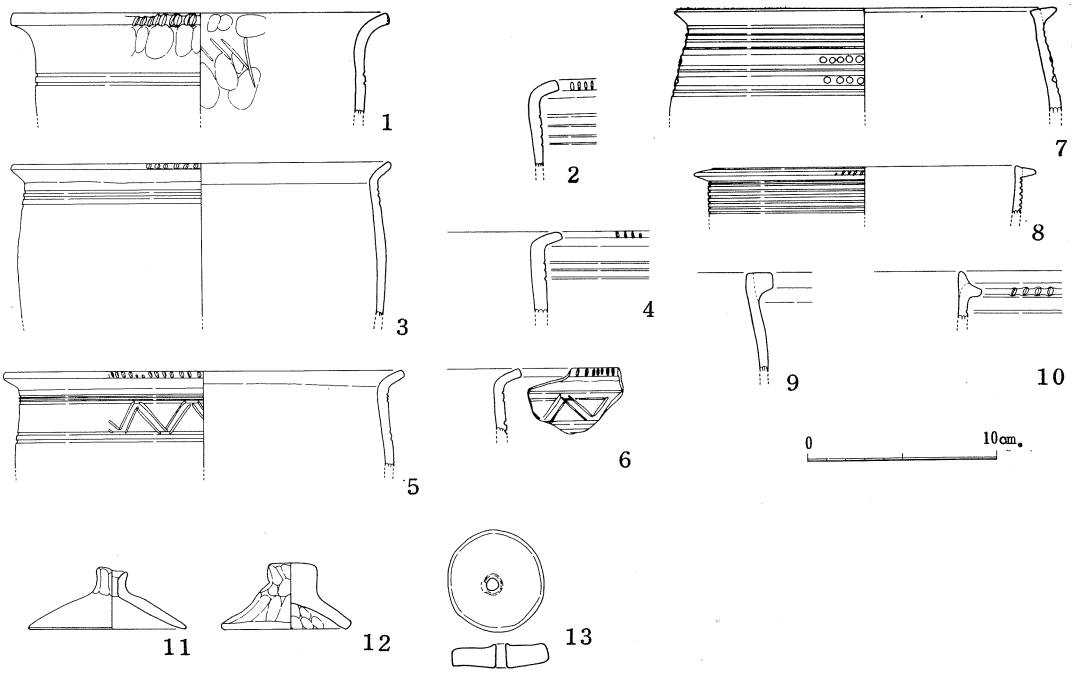
註2　時期的には後出するものであるが善通寺市善通寺西遺跡の同規模の溝の最上層に5世紀前半代の小形丸底壷を並べた祭祇遺構例がある。

註3　非常に近接した時期の遺構の先後関係の解明には規準を統一した遺物の量的な比較以外には遺物からは決定できないであろう。

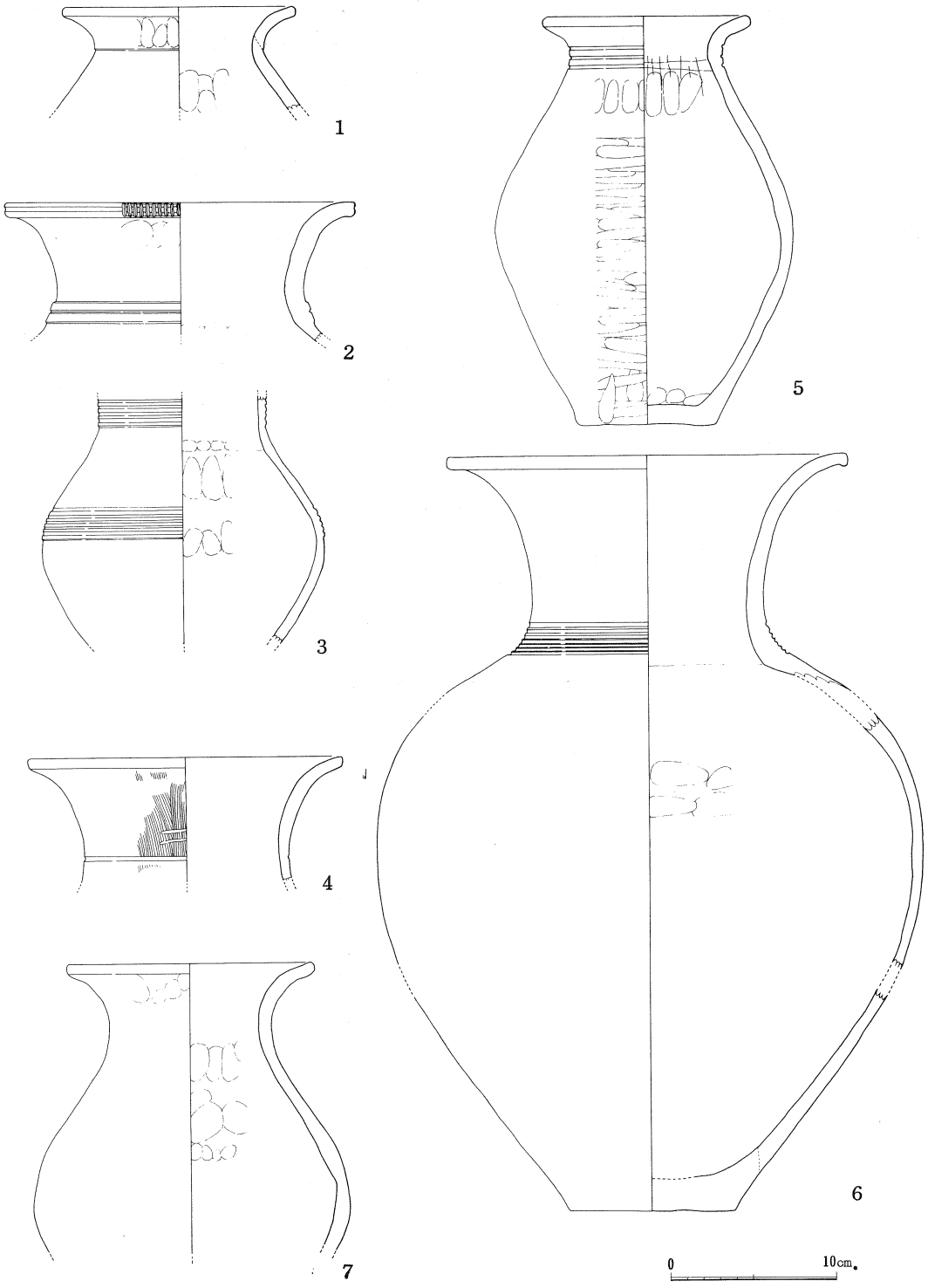
註4　畿内弥生式土器編年を用いれば第二様式は壷形土器における櫛描文の出現をもって始まるとされる。中の池遺跡においては甕に櫛描文は出現するが，壷にはまだ櫛描文は施されていない。前期後半から末の時期に中の池遺跡の環濠の時期は比定されるであろう。



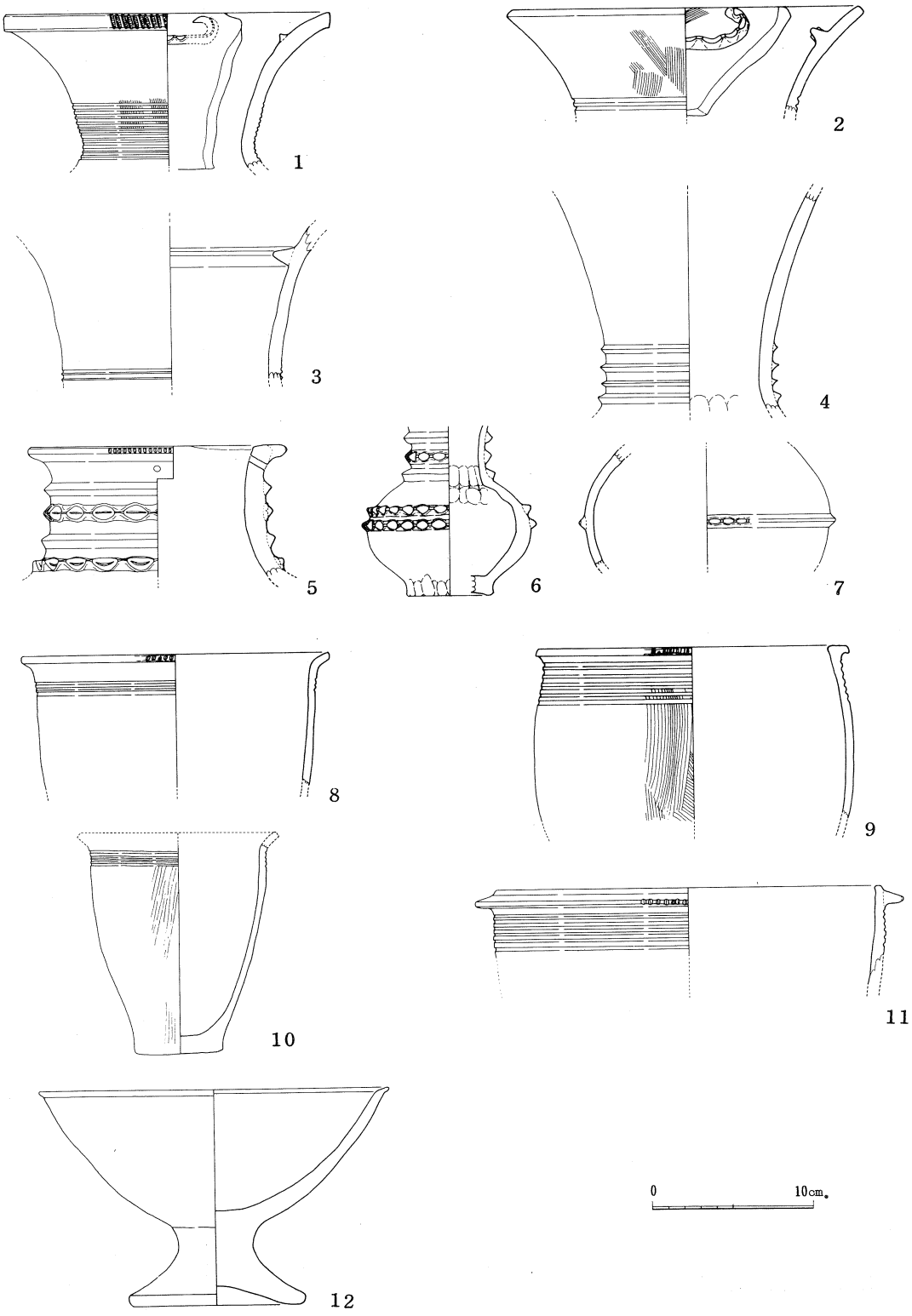
第13図　SD8101出土土器実測図



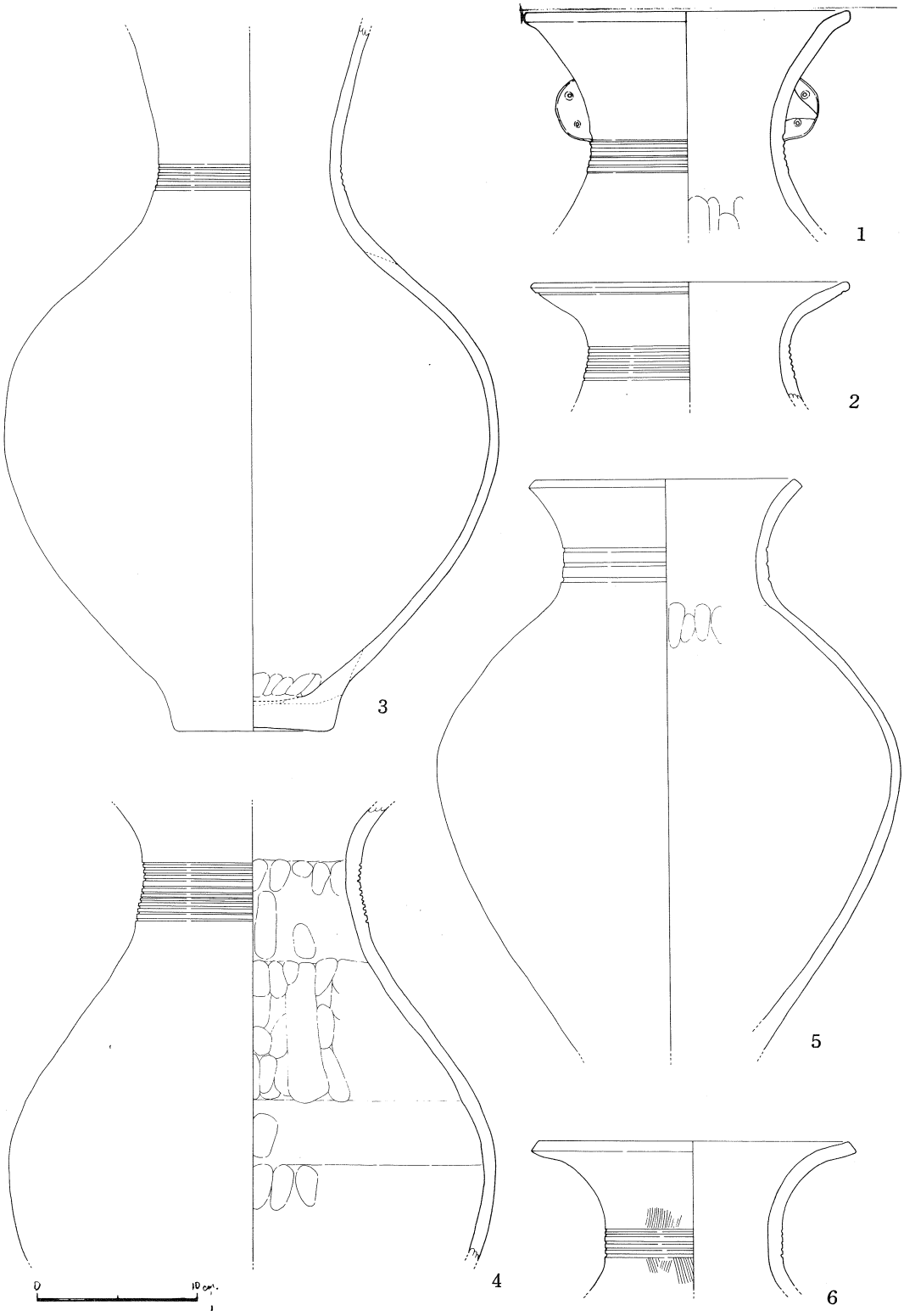
第14図　SD8101出土土器実測図



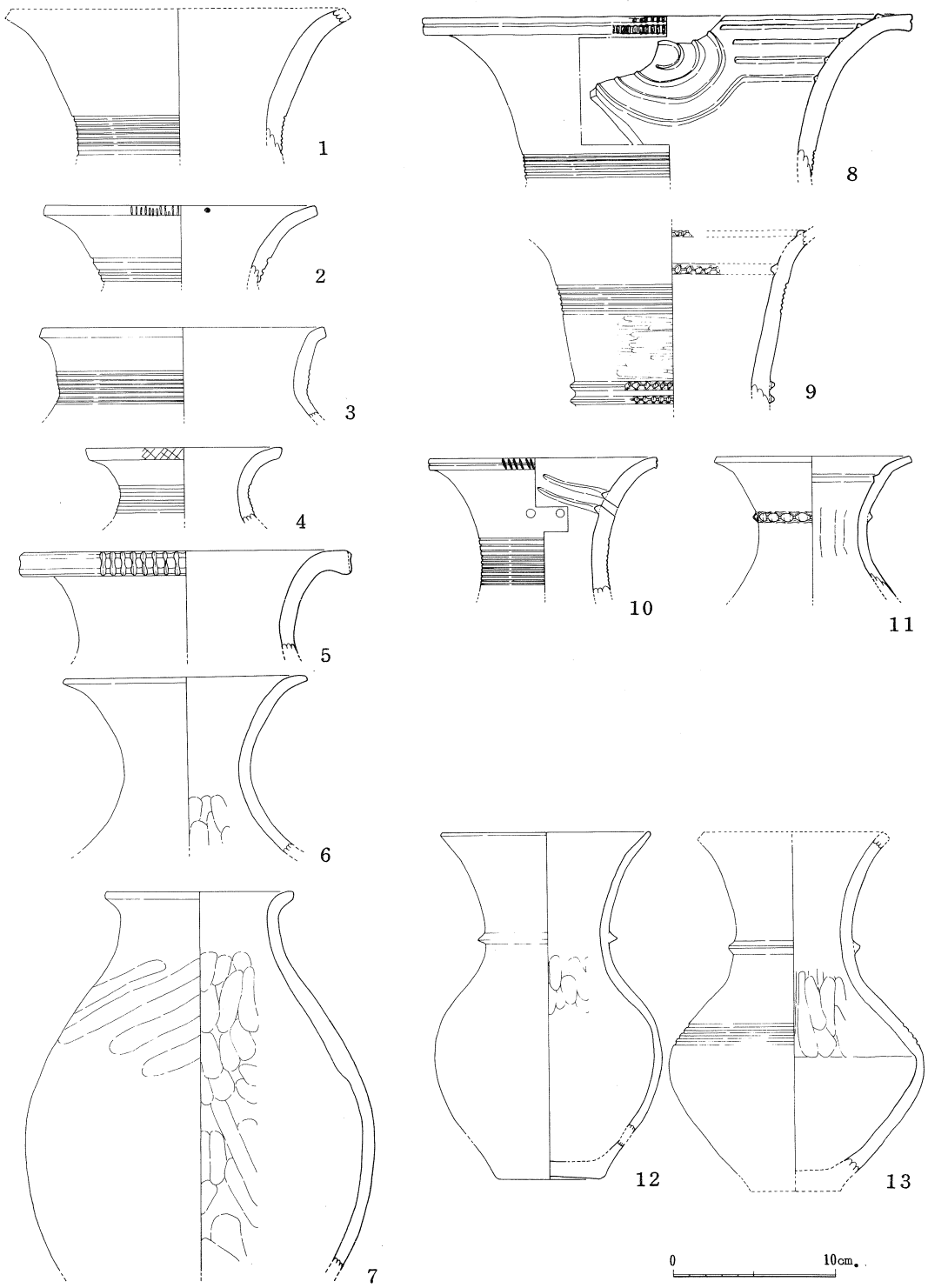
第15図　SD8105出土土器実測図



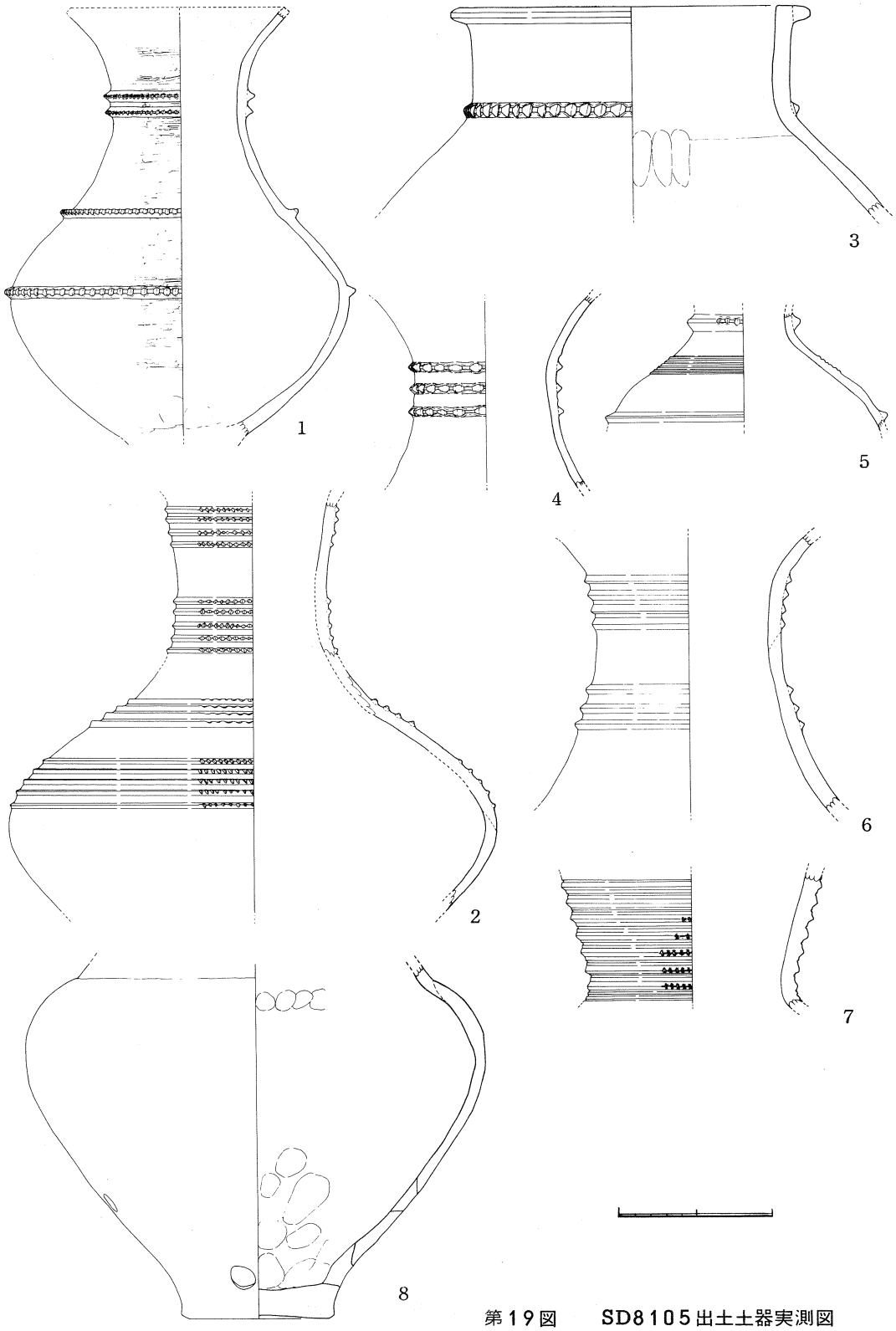
第16図　SD8105出土土器実測図



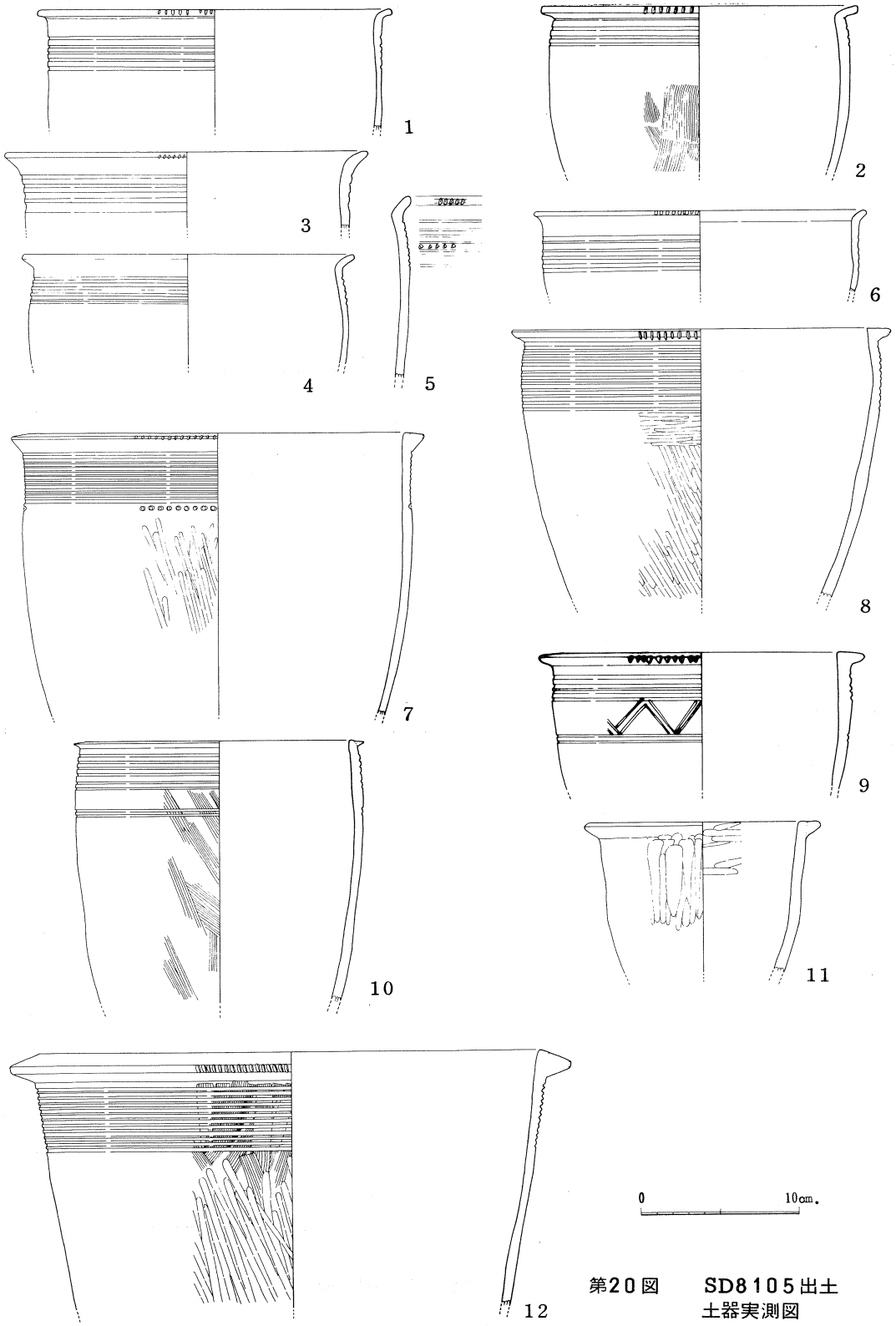
第17図　SD8105出土土器実測図



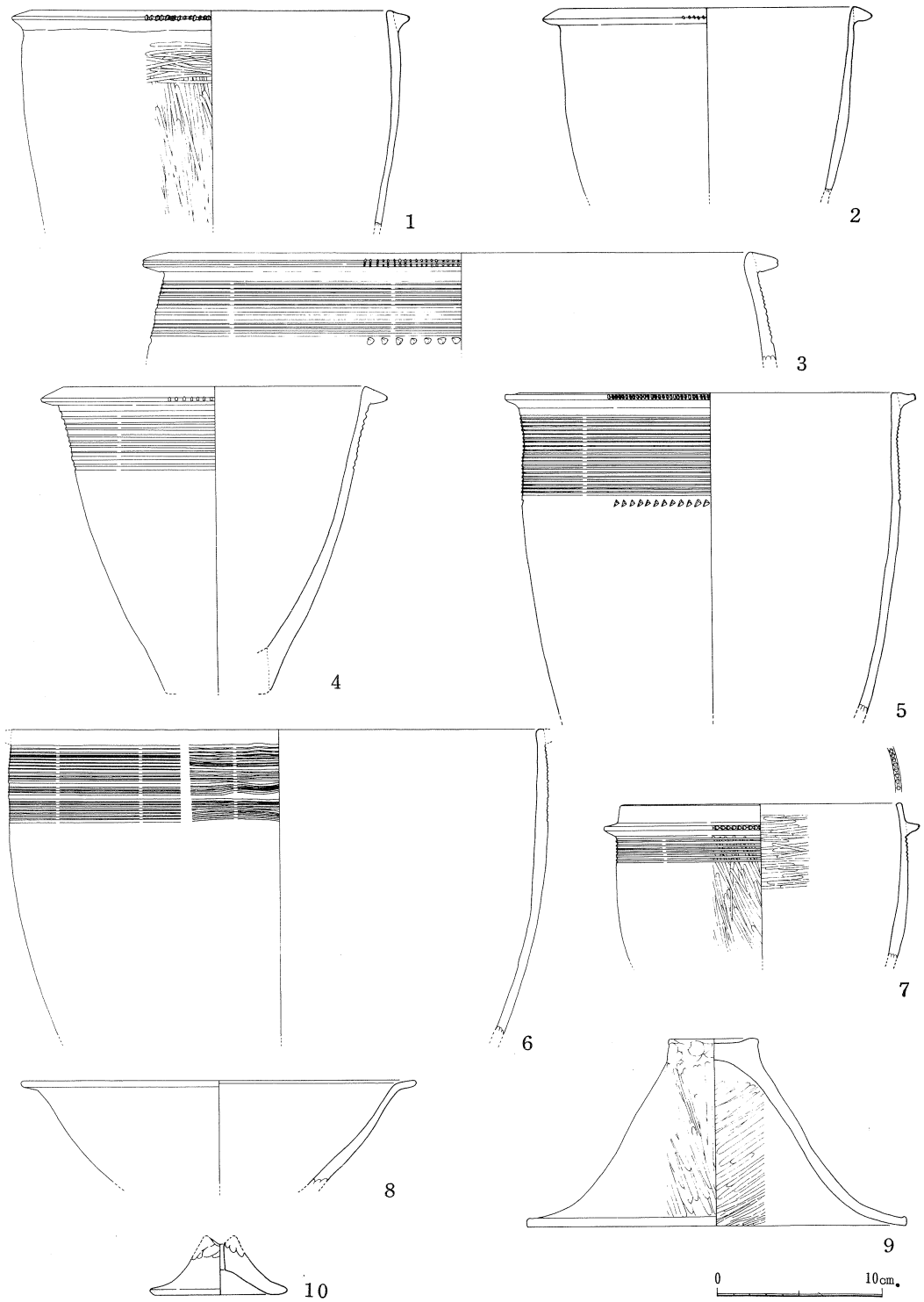
第18図　SD8105出土土器実測図



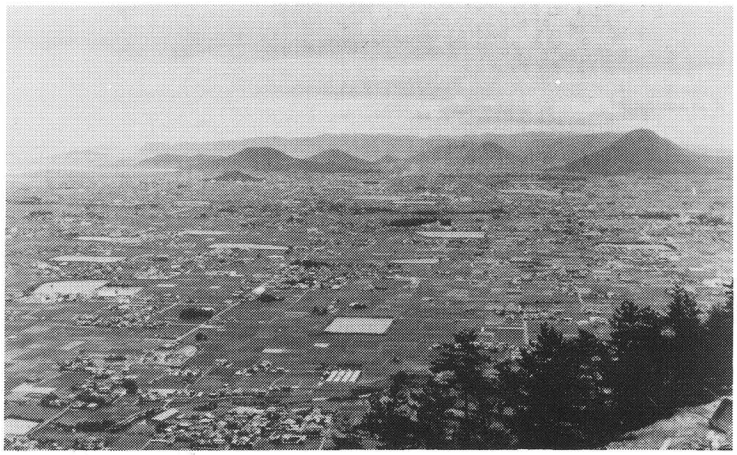
第19図　SD8105出土土器実測図



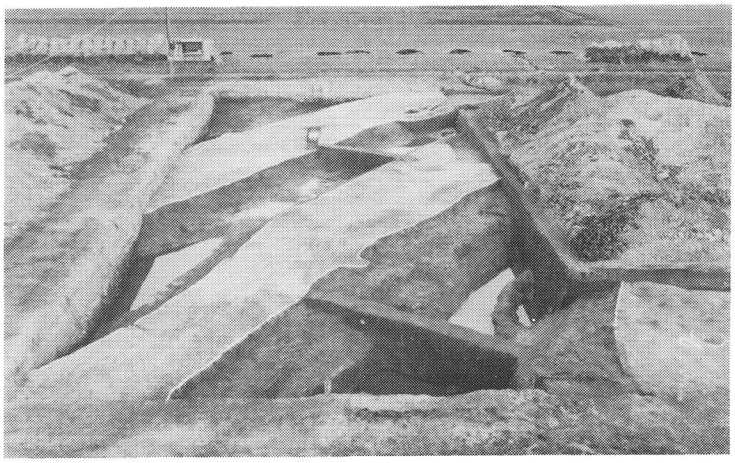
第20図　SD8105出土土器実測図



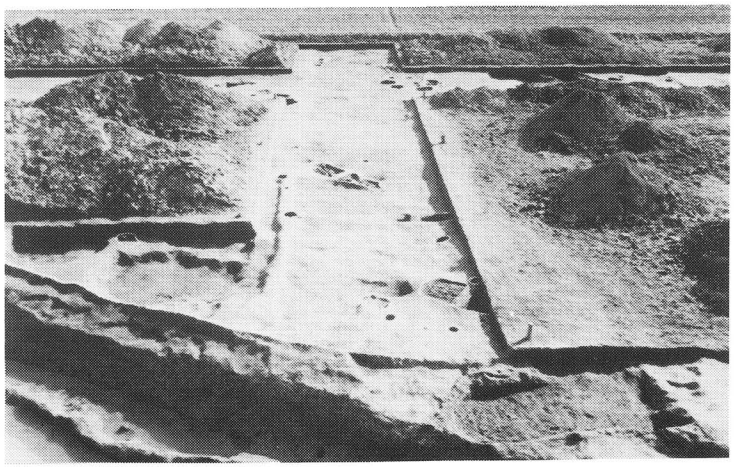
第21図　SD8105出土土器実測図



中の池遺跡遠景
（西方，天霧山から）



C・D列（西から）

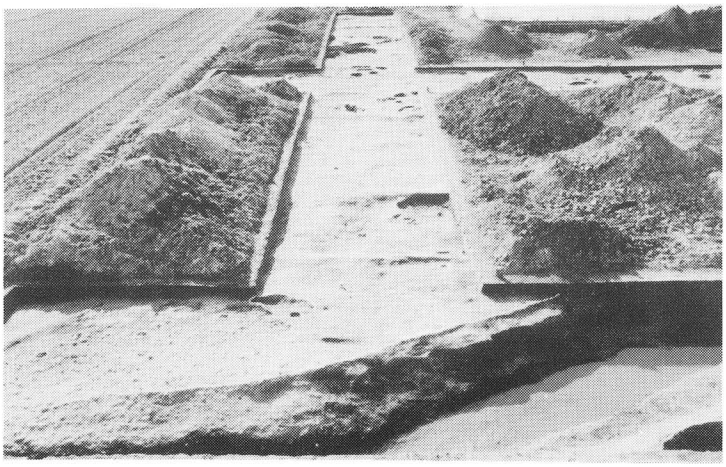


6列（北から）

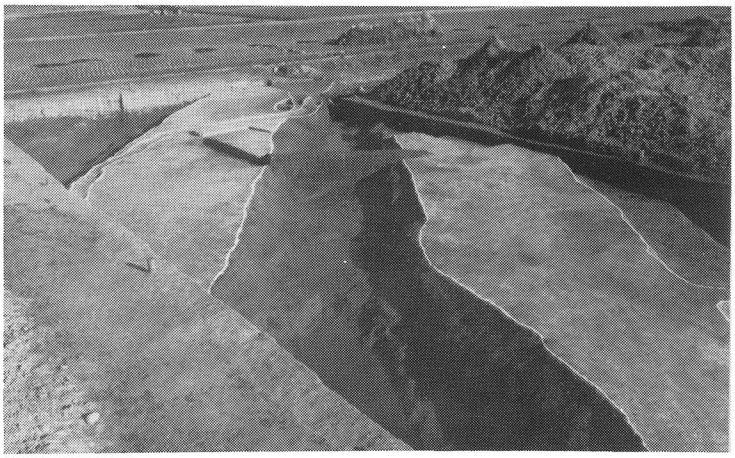
図版２

10列（北から）

10列（南から）

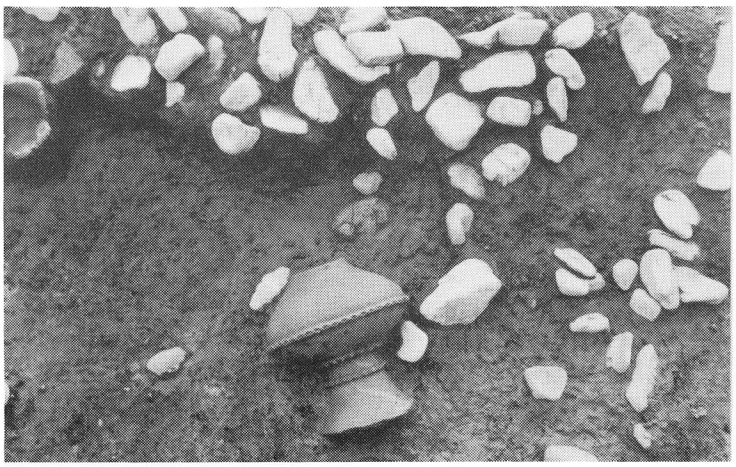


H列（東から）



ＳＤ８１０１（北西から）

ＳＤ８１０１・Ｄ８配石遺構全景
（北西から）

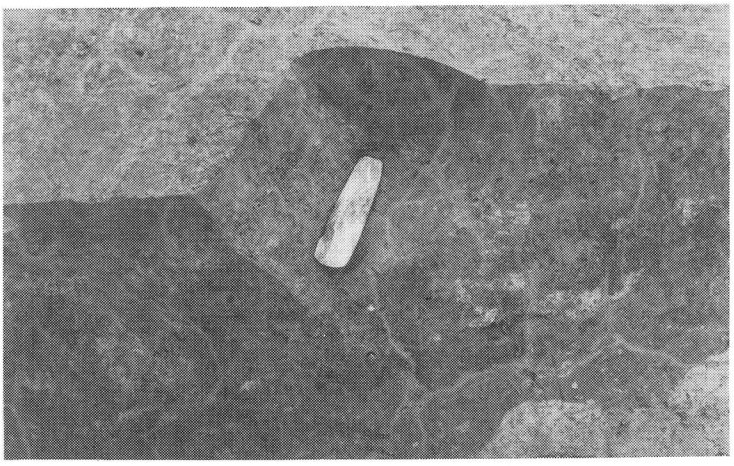


ＳＤ８１０１・Ｄ８・配石遺構内
壺出状況（北東から）

図版4

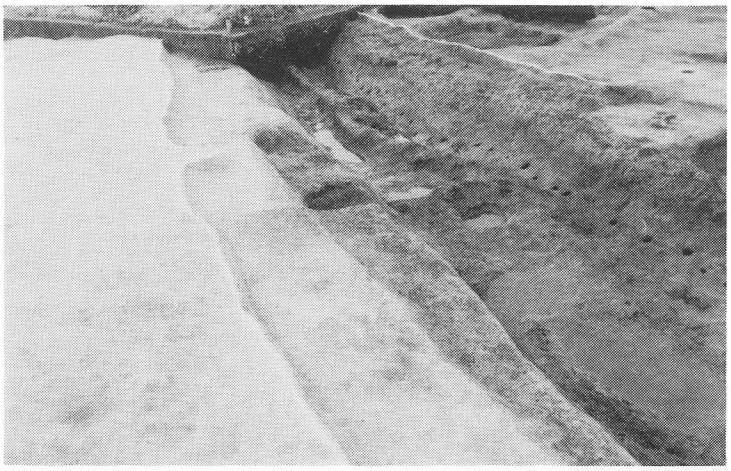
ＳＤ８１０１・Ｄ８・土層断面
（北西から）

ＳＤ８１０２（南東から）



ＳＤ８１０２・Ｄ１０・蛤刃石斧
出土状況（北から）

SD8105・C5～E7
（北西から）



SD8105・C5～E7
（北北西から）

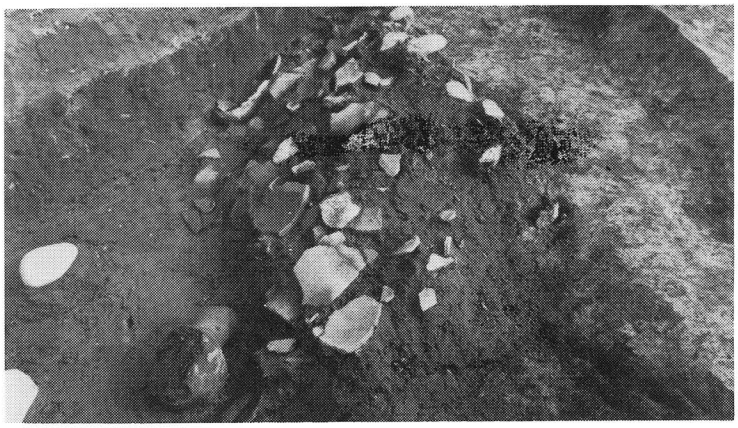
SD8105・C5～E7
（東から）

図版6

SD8105・D6・土層断面
（南東から）

SD8105・G10（南東から）

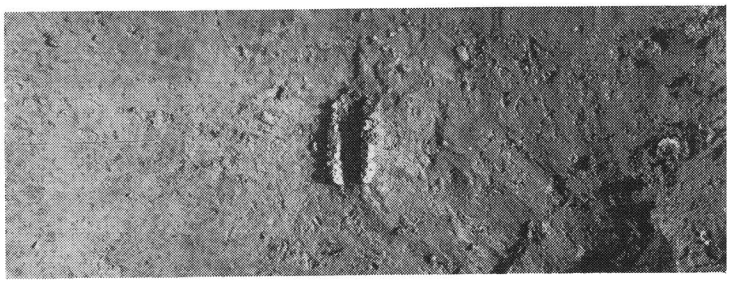
SD8105・G10・土層断面
（南南東から）



SD8105・E7・遺物出土状況　（北西から）

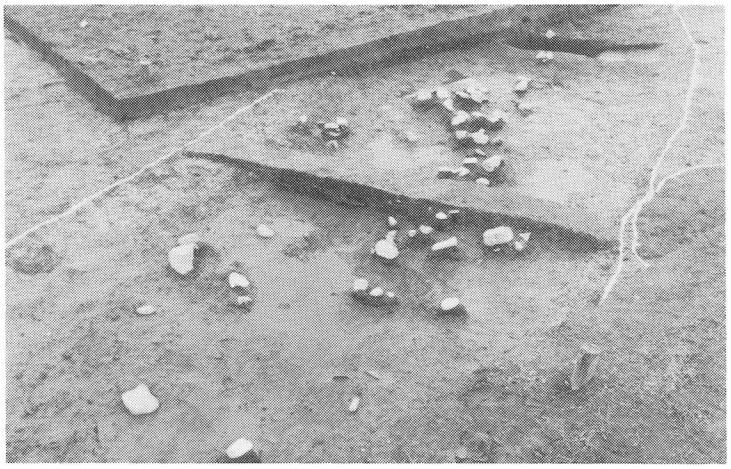
SD8105・C5・壺出土状況
（東から）

SD8105・D6・壺出土状況
（北から）

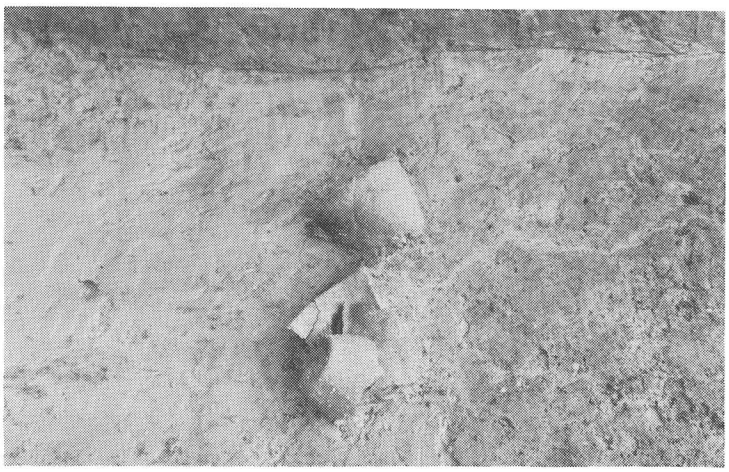


SD8105・E7・獣下がく骨出土状況

図版8



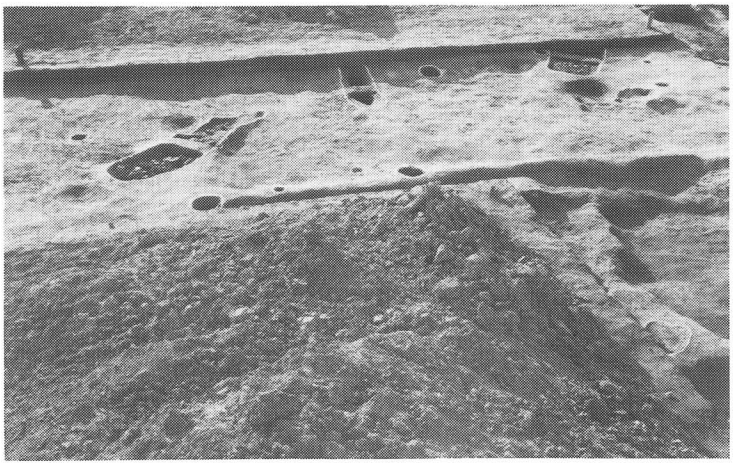
SD8105・G10・ 礫群検出状況（南東から）



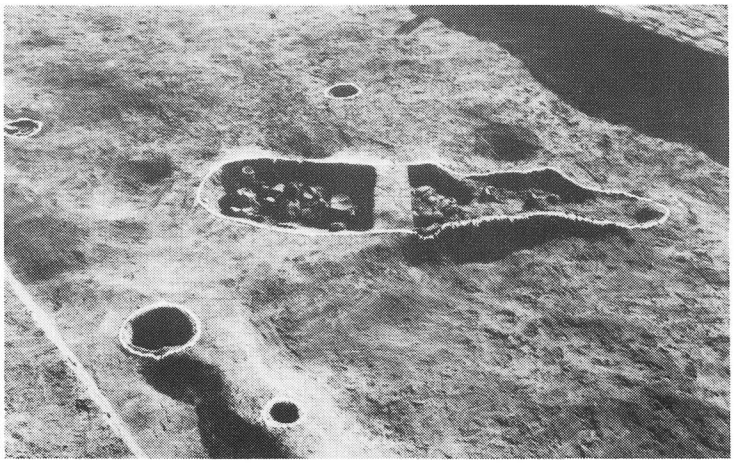
SD8105・H10・ 甕出状況（西から）

SD8105・G10・ 土器出土状況（東から）

E 6・F 6ピット群
（南東から）

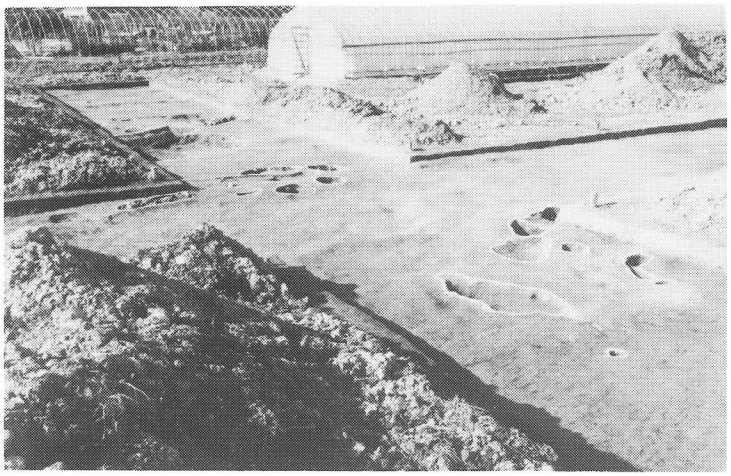


E 6・F 6ピット群
（東から）

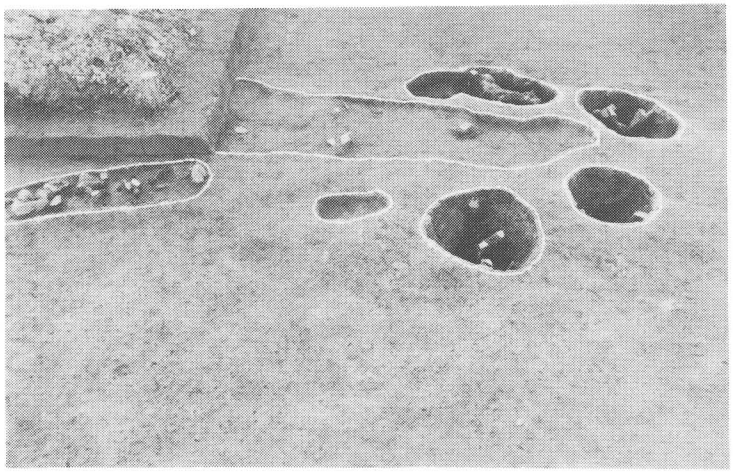


F6・SP8125 遺物出土状況
（北東から）

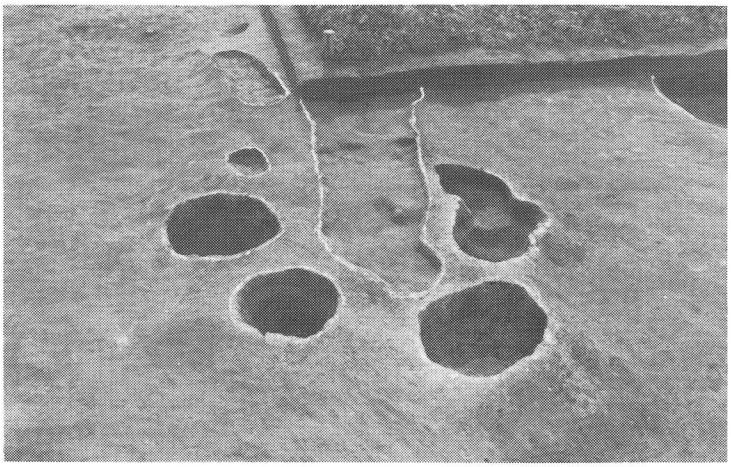
図版10



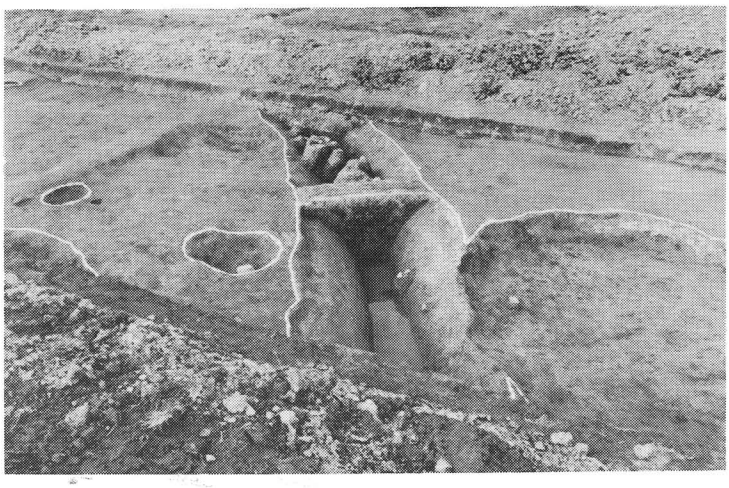
H5・6・I6ピット群
（東南東から）



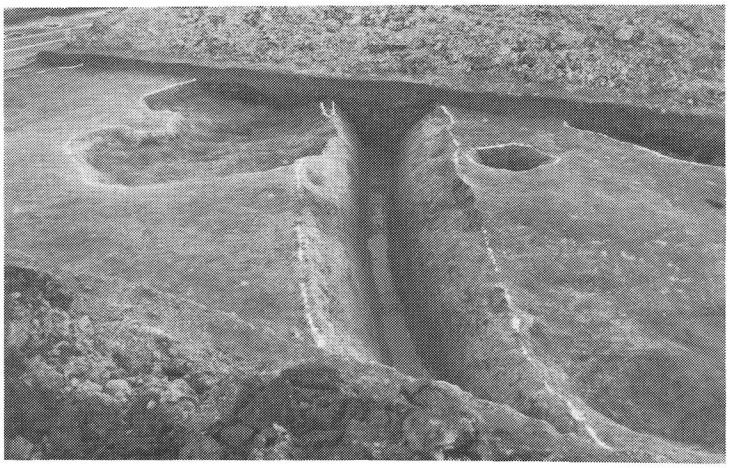
H5・6・I6ピット群遺物出土状況　（東から）



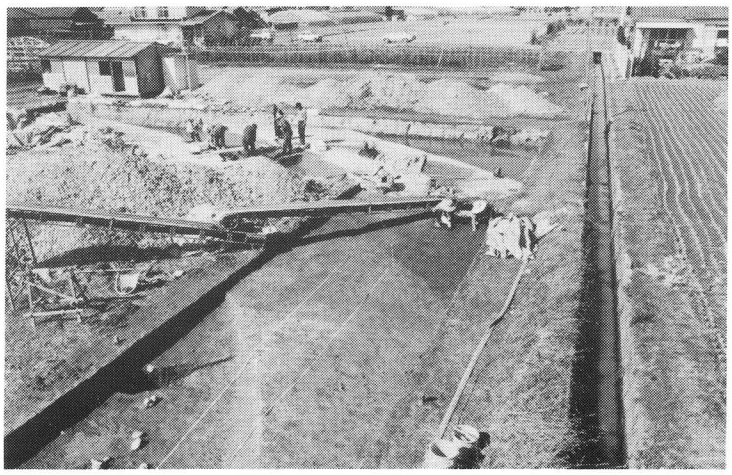
H5・6・I6ピット群完掘後
（北から）



ＳＤ８１０４ 完掘前
（南東から）

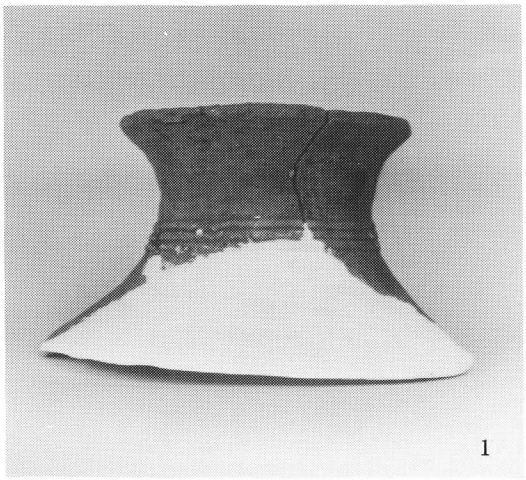


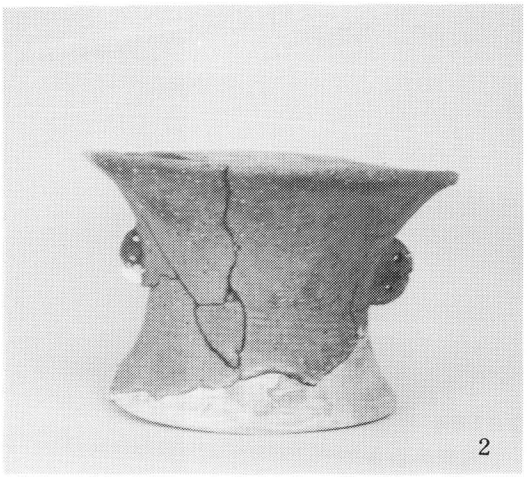
ＳＤ８１０４ 完掘後
（北西から）

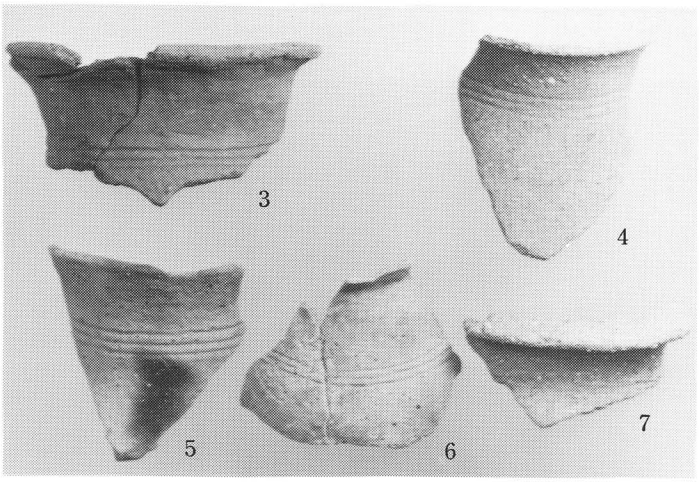


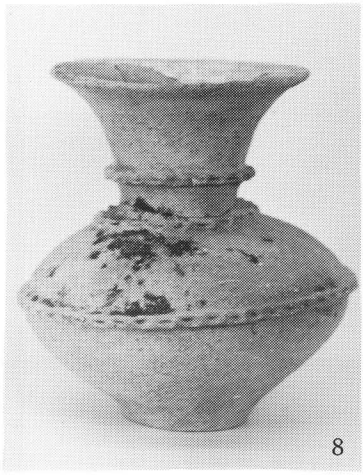
ＳＤ８１０１ 発掘風景
（南東から）

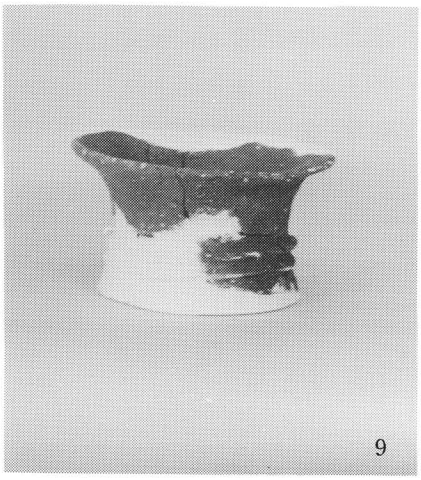
図版12

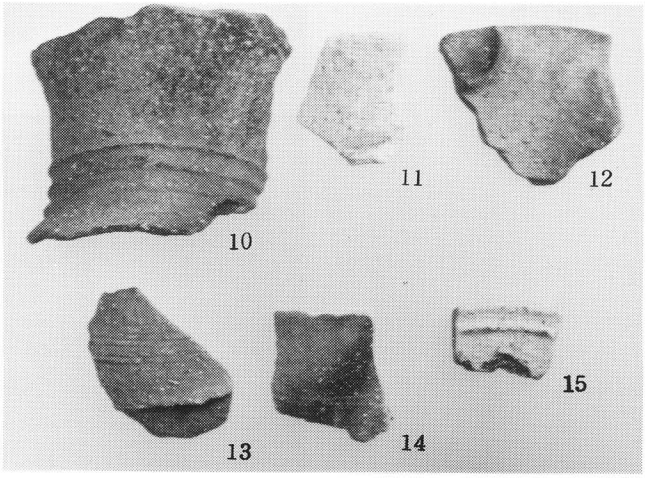




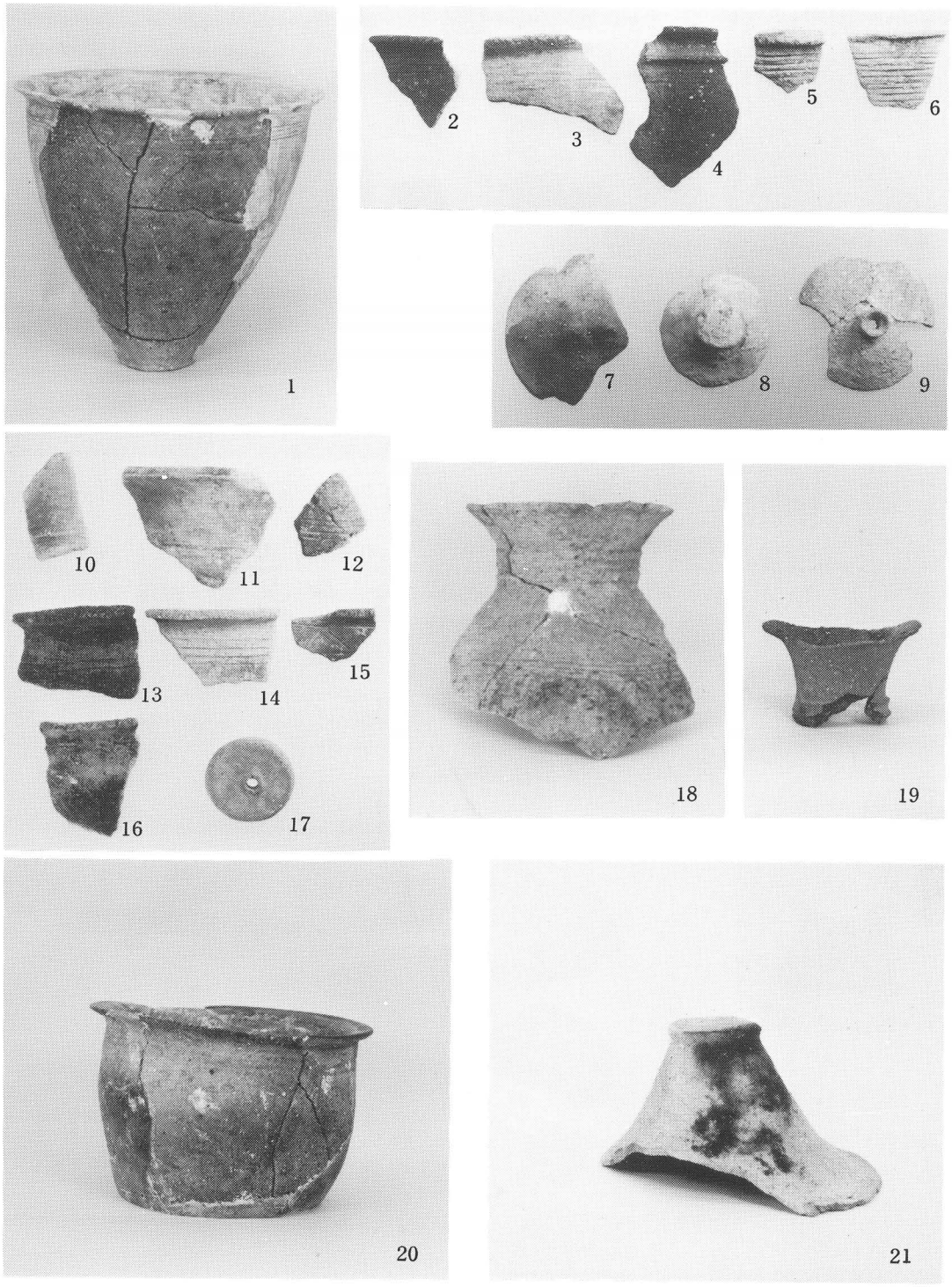






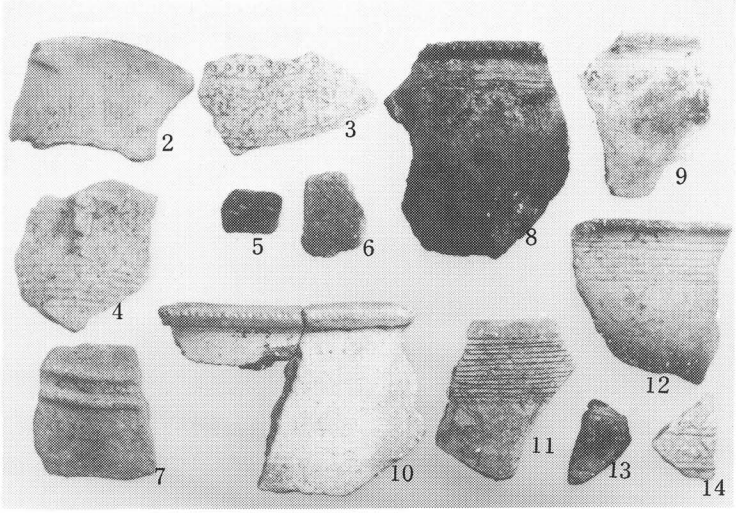


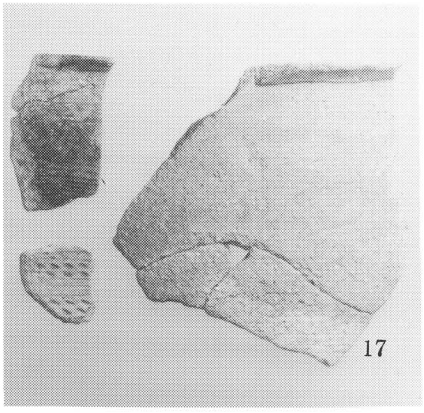
SD8101上層出土土器

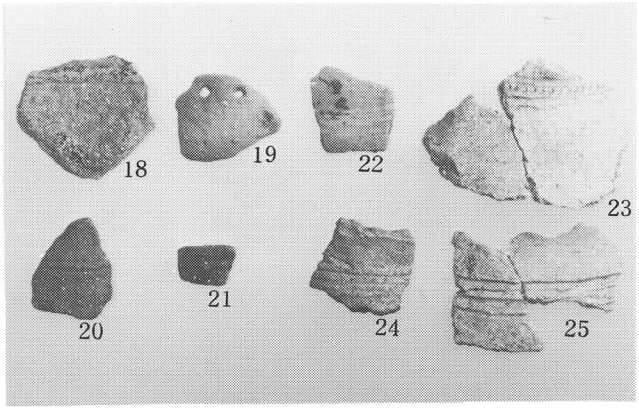


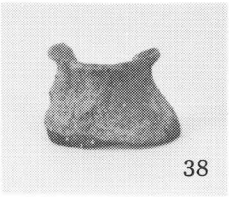
SD8101出土土器（1～7上層，10～17下層，他一括）

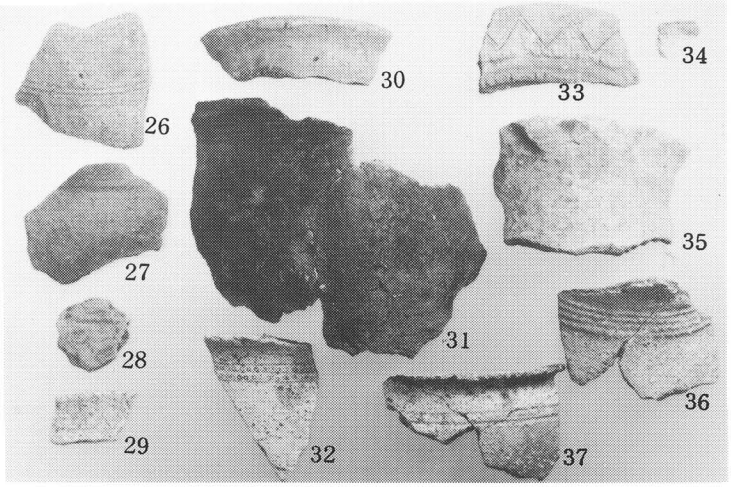
図版14



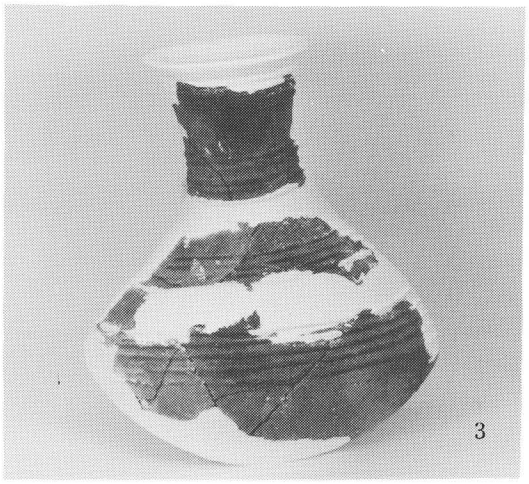


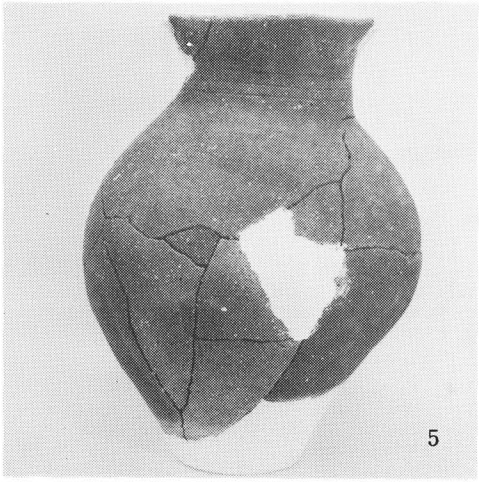






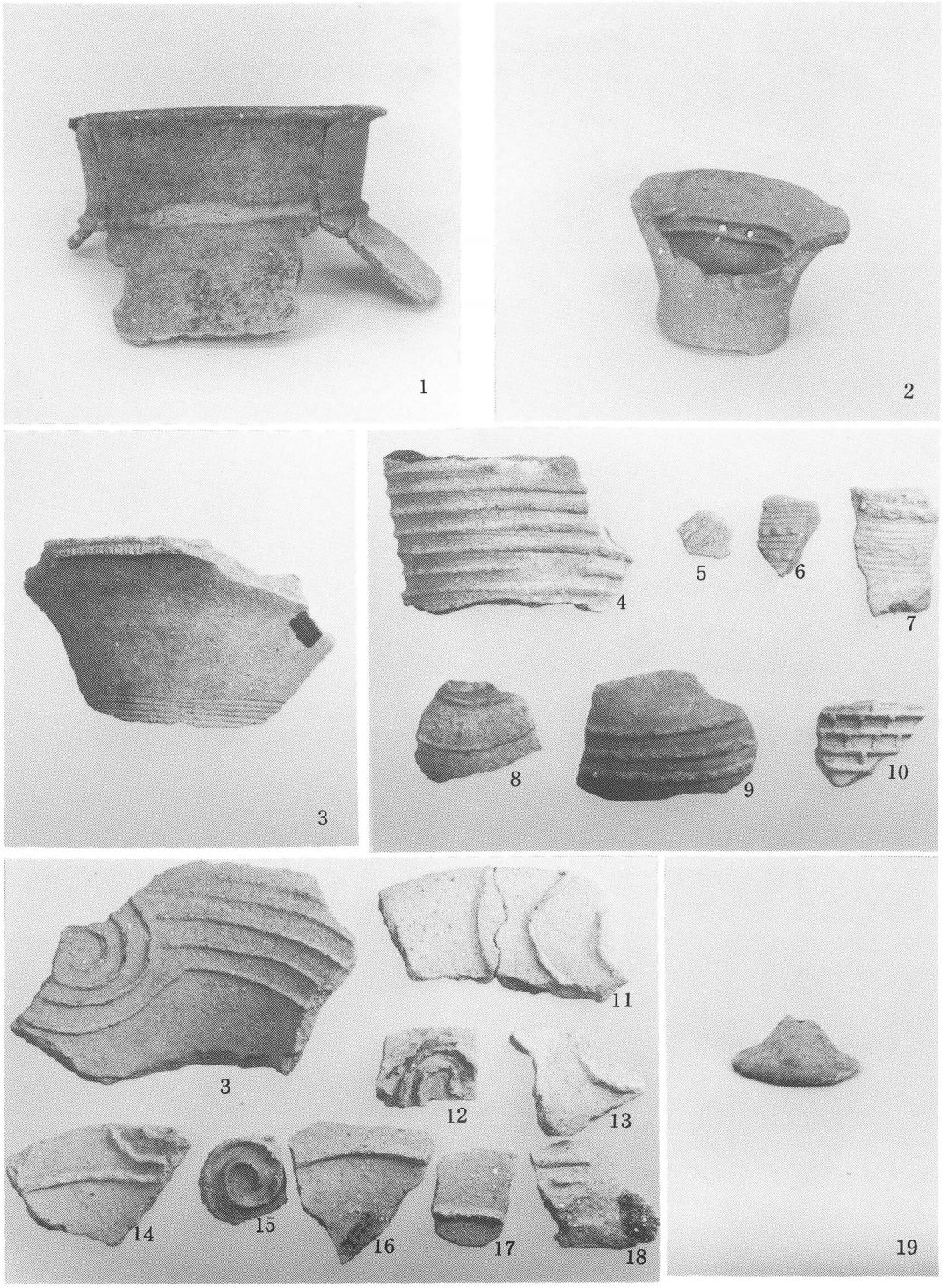
SD8102，03，04及びピット出土土器（1～8・10～17 SD8102，18～21 SD8103，9・22～25 SD8104，26～29 SK8117，30～32 SK8125，33・34 SK8108，35～38 SK8110）



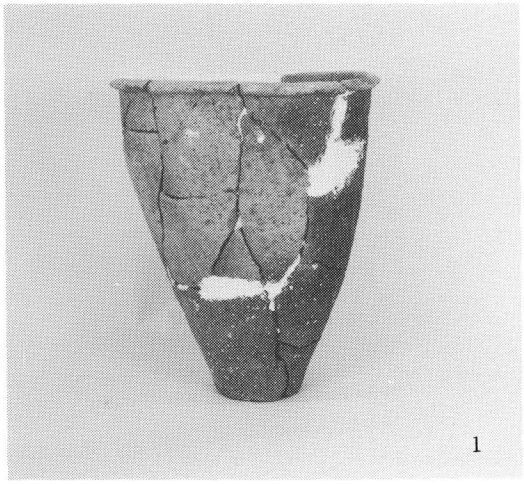


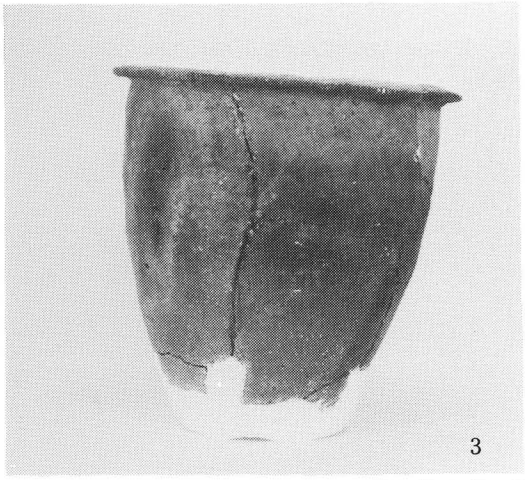
SD8105上層出土土器

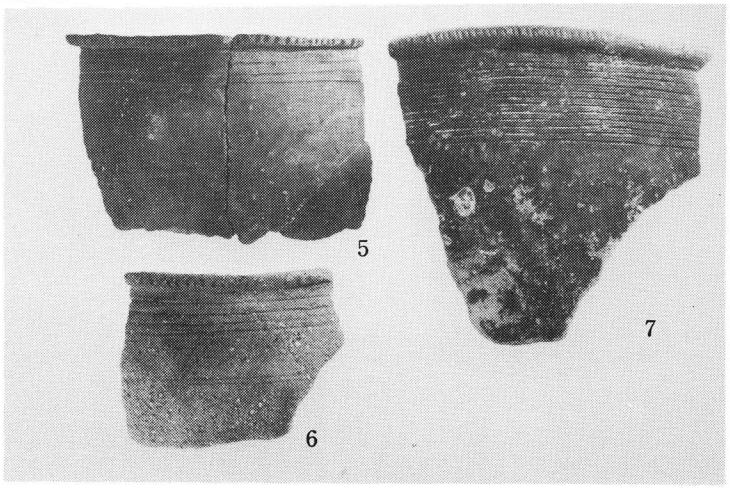
図版16



SD 8105上層出土土器

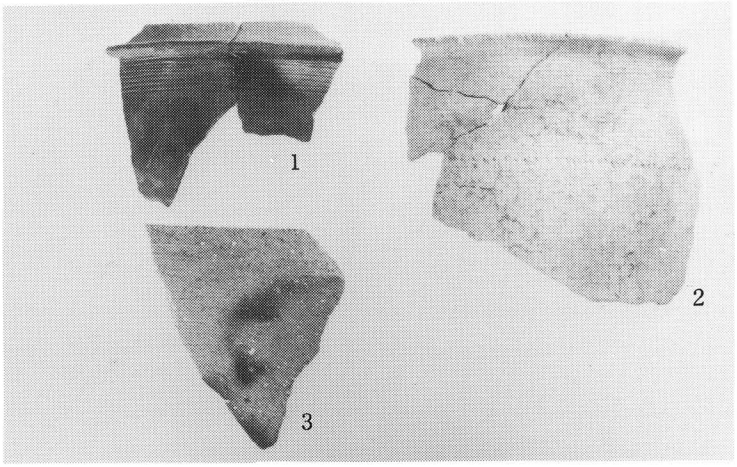


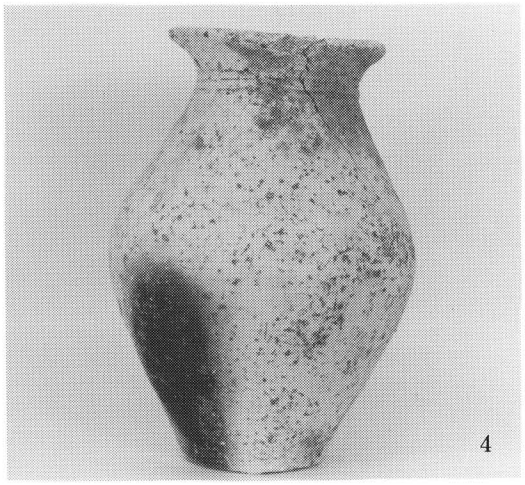


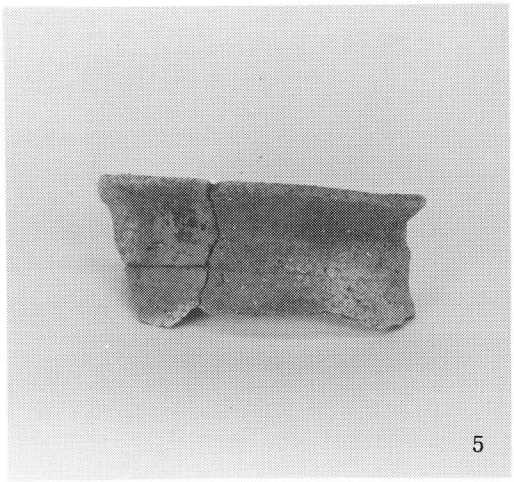


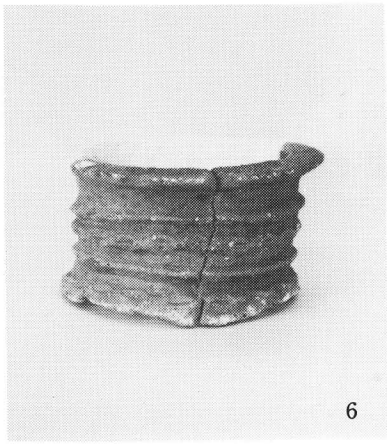
SD8105上層出土土器

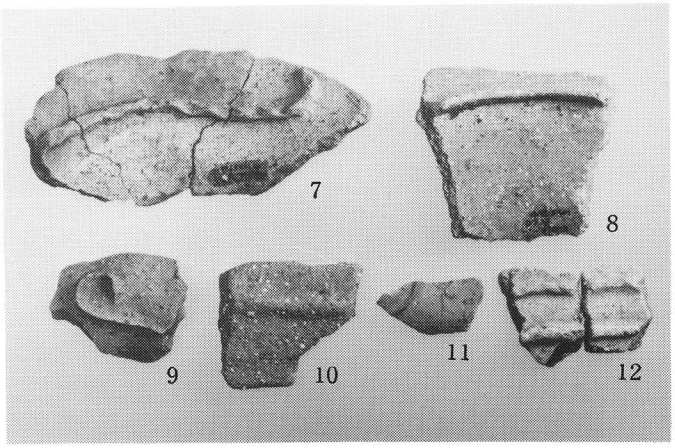
図版18



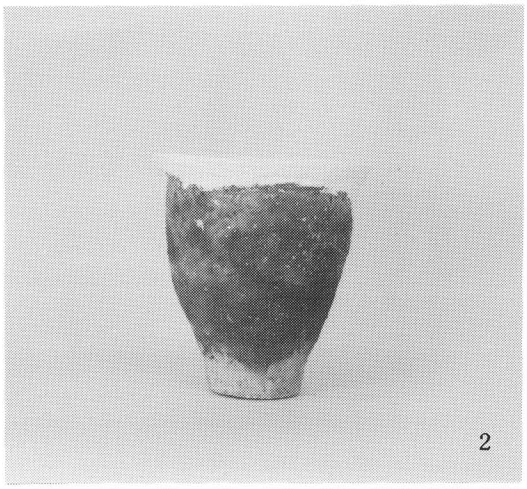


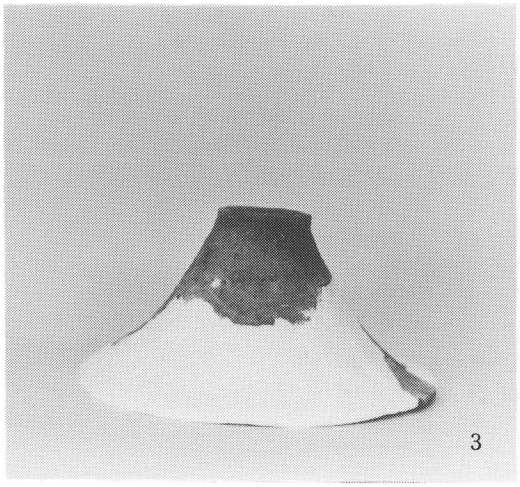






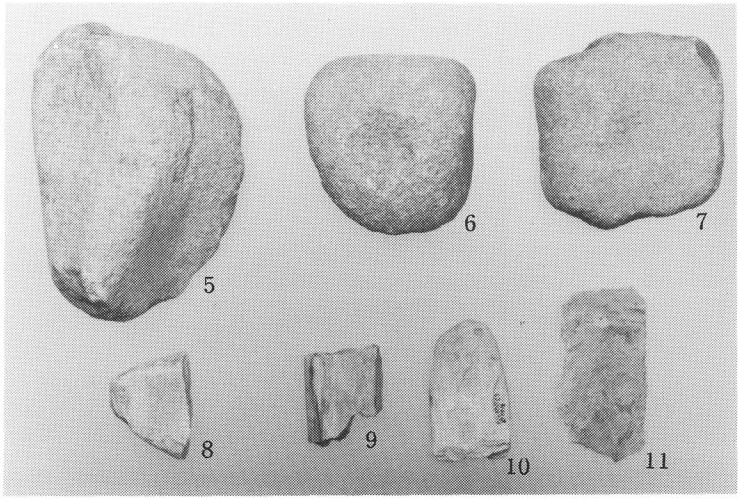
SD8105上層，中層出土土器（1～3上層，4～12中層）





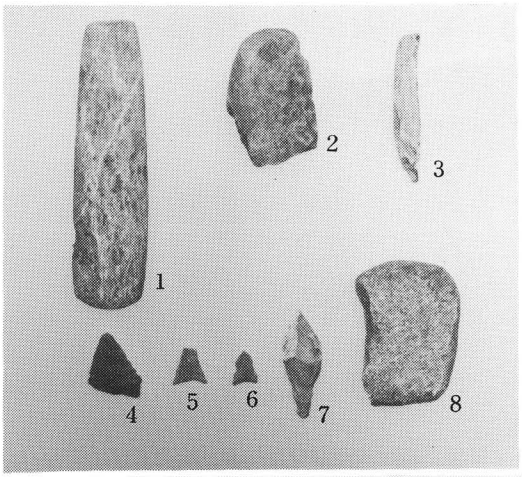
▲
1～4　SD8105 中層

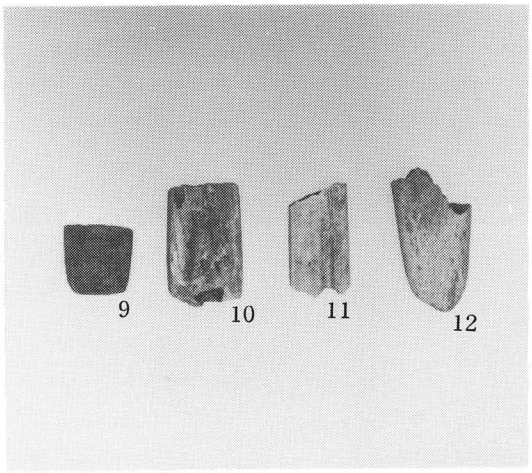
5～11 SD8101 ►

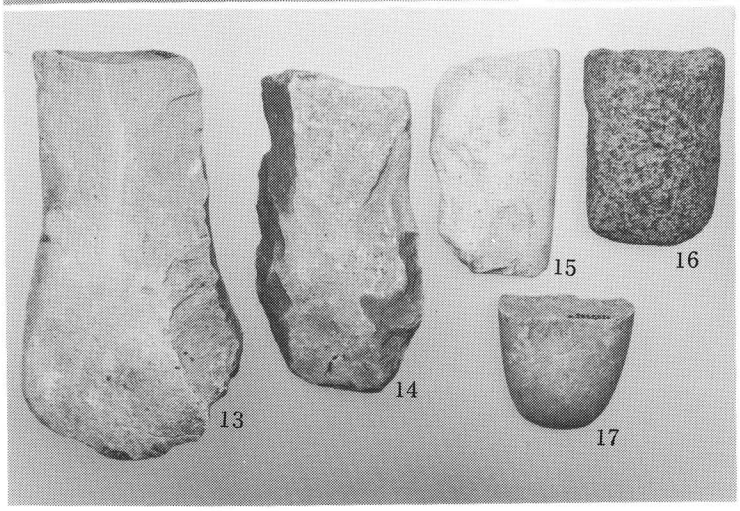


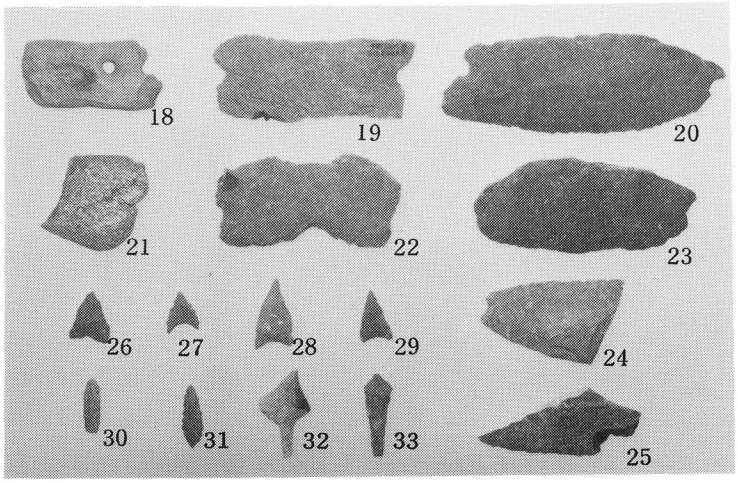
SD8105中層出土土器，SD8101出土石器

図版20

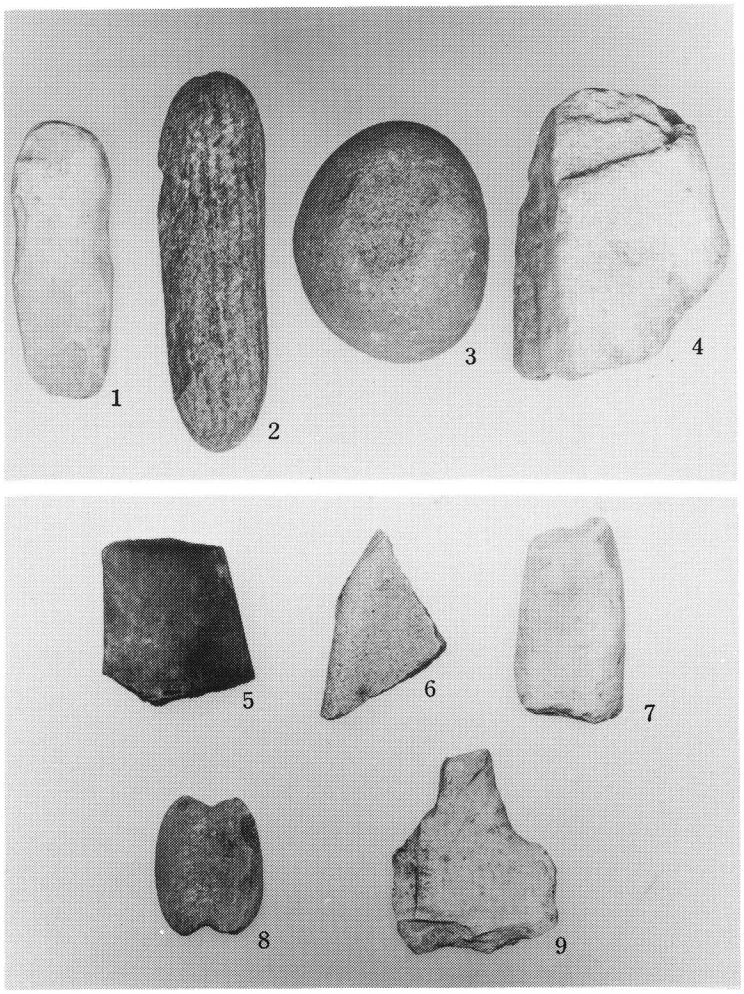








SD8102, 04, 05, 出土石器（1～3・5～7 SD8101, 4・8 SD8104, 9～33 SD8105）



SD 8105出土石器

表1　土器観察表（i）

番号	挿図番号	遺構	土層	グリッド	器種	口径	器高	胎土	沈線条数	備考
1	13－1	SD8101	上層	C 8	壷	16.0	－	2㎜以下の砂粒を含む		頸部に段を有し，ヘラ状の器具でさらに整える。口縁部は開きながら外反し，端部に沈線が1条走る。
2	13－2	〃	下層	C 7	〃	－	－	2㎜以下の細砂を含む		頸部に段を有する。段上部にヘラ状の器具で浅い磨き状の沈線が1条走る。口縁部は開きながら外反。
3	13－3	〃	一括	〃	〃	18.2	－	3㎜以下の砂粒及び金雲母		削り出し突帯が1条残る。口縁部は開きながら外反する。口縁端部に沈線1条。外面指頭によるナデ調整。
4	13－4	〃	〃	C 6	〃	17.5	－	3㎜以下の砂粒を含む		頸部に3条の削り出し突帯。外面と口縁部内面はヘラ磨き。
5	13－5	〃	〃	C 8	〃	23.0	－	3㎜大以下の砂粒を含む		頸部に4条の削り出し突帯。口縁部外面に2孔をもつ耳状の貼付突起がつく。口縁部は開きながら外反。
6	13－6	〃	上層	C 7	〃	13.0	－	〃		頸部に2条の削り出し突帯。やや直立気味の口縁部を有する。
7	13－7	〃	一括	〃	〃	15.2	－	3㎜以下の砂粒を含む		頸部に2条以上のヘラによる沈線。口縁端近くで外反する。
8	13－8	〃	下層	D 9	〃	15.0	－	〃		頸部に2条のヘラによる沈線。口縁端近くで外反する。
9	13－9	〃	一括	C 6	〃	－	－	4㎜以下の砂粒を含む		頸部に3条のヘラによる沈線が走り，その間にヘラによる削み目が施される。口縁部は外反する。
10	13－10	〃	上層	C 7	〃	15.8	－	3㎜以下の砂粒を含む		頸部に3条のヘラによる沈線が走る。口縁部は開きながら外反。
11	13－11	〃	一括	〃	〃	－	－	4㎜以下の砂粒を含む		頸部に4条のヘラによる沈線が走る。
12	13－12	〃	上層	D 8	〃	14.5	20.1	3㎜以下の砂粒を含む		配石遺構内より出土。頸下部，肩上部，胴部に貼付突帯があり，突帯には爪による刻み目。
13	13－13	〃	〃	D 9	〃	17.0	－	〃		頸部に8条のヘラによる沈線，肩部に7条のヘラによる沈線が走る。口縁部は高く，外反しながら伸びる。
14	13－14	〃	〃	D 9	〃	－	－	4㎜以下の砂粒を含む		頸部に3条の貼付突帯。口縁部は高く伸びる。
15	13－15	〃	〃	C 7	〃	－	－	3㎜以下の砂粒を含む		口縁部内面に貼付突帯。突帯は曲って口縁端部につながる単純なものである。
16	13－16	〃	一括	〃	〃	9.1	－	2㎜以下の砂粒を含む		口縁端部は短く外反し，1孔を有する。
17	13－17	〃	下層	〃	(〃)	－	－	1㎜以下の砂粒を含む		肩部に4条のヘラによる沈線があり，その上部に3条のヘラによる沈線による連弧文風の文様がある。下部にも同様な可能性。
18	13－18	〃	〃	〃	(〃)	－	－	2㎜以下の砂粒を含む		刻み目を有する貼付突帯。下位に2条のヘラによる沈線及びその下位に斜格子のヘラによる沈線による文様。
19	13－19	〃	上層	D 8	(〃)	－	－	3㎜以下の砂粒を含む		刻み目を有する2条の貼付突帯。その上位に3条の削り出し突帯。
20	14－1	〃	下層	C 7	甕	20.0	－	〃	ヘラ沈2	2条のヘラによる沈線を有する如意状口縁甕。口縁端部下位にヘラによる刻み目。
21	14－2	〃	〃	〃	〃	－	－	〃	ヘラ沈4	4条のヘラによる沈線を有する如意状口縁甕。口縁端部にヘラによる刻み目。
22	14－3	〃	一括	C 6	〃	20.0	－	〃	ヘラ沈3	3条のヘラによる沈線を有する如意状口縁甕。口縁端部にヘラによる刻み目。
23	14－4	〃	〃	〃	〃	－	－	〃	ヘラ沈3	3条のヘラによる沈線を有する如意状口縁甕。口縁端部にヘラによる刻み目。
24	14－5	〃	〃	C 7	〃	21.0	－	2㎜以下の砂粒を含む	ヘラ沈3 山形文 ヘラ沈2	2・3条のヘラによる沈線が上下に走り，その間に2条の沈線による山形文が施される如意状口縁の甕。口縁端部にヘラによる刻み目。
25	14－6	〃	下層	〃	〃	－	－	1㎜以下の細砂を含む	ヘラ沈2 山形文 ヘラ沈2以上	2条のヘラによる沈線が上下に走り，その間に2条の沈線による山形文が施される如意状口縁の甕。口縁端部にヘラによる刻み目。
26	14－7	〃	一括	C 8	〃	20.1	－	2㎜以下の砂粒を含む	ヘラ沈4刺突文 ヘラ沈2刺突文 ヘラ沈2	上面が平坦な貼付口縁を有し，ヘラによる沈線とその間に円形の刺突文が施される。胴部上位が内傾する。
27	14－8	〃	〃	C 7	〃	18.0	－	2㎜以下の細砂を多く含む	ヘラ沈	上面が平坦な薄く短い貼付口縁を有する。7条のヘラによる沈線を有し，口縁端部にヘラによる刻み目を有する。
28	14－9	〃	〃	D 9	〃	－	－	3㎜以下の砂粒を含む	無	逆「L」字状のかなり肥厚した貼付口縁を有する。
29	14－10	〃	〃	C 7	〃	－	－	〃	ヘラ沈1	直立する口縁下部に貼付突帯を有する。 1条以上のヘラによる沈線を有する。
30	14－11	〃	〃	D 9	蓋	8.3	3.3	2㎜以下の砂粒を含む		壷の蓋で，つまみ部は中空で円柱状を呈する。
31	14－12	〃	〃	C 7	〃	6.8	3.6	砂粒は含まず		壷の蓋で，指頭による調整が顕著。
32	14－13	〃	下層	〃	紡錘車	5.1	1.3	1㎜以下の砂粒を含む		焼成前の穿孔を有する。
33	15－1	SD8105	中層	C 5	壷	14.0	－	3㎜以下の黒・灰白色の砂粒を含む		頸部に段を有する。口縁部外面は指頭による調整が著しい。
34	15－2	〃	〃	D 6	〃	21.1	－	3㎜以下の砂粒を含む		頸部に2条の削り出し突帯を有する。口縁部は開きながら外反し，口縁端部に1条の沈線がめぐりヘラによる削み目。
35	15－3	〃	〃	E 7	〃	－	－	4㎜以下の砂粒を多く含む		頸部下部と胴部に削り出し突帯。直立する頸部を有する壷。

表2　土器観察表（ii）

番号	挿図番号	遺構	土層	グリッド	器種	口径	器高	胎土	沈線条数	備考
36	15－4	SD8105	中層	C 5	壷	19.0	－	5㎜以下の砂粒を含む		頸部に1条の沈線を有する。外面に10条/㎝の刷毛目。
37	15－5	〃	〃	G 10	〃	12.6	24.8	1～2・3㎜大の砂粒（長石・石英），及び金雲母を含む		頸部に3条のヘラによる沈線を有する。口縁部は短く，外反し，胴部は指頭によるナデ調整である。
38	15－6	〃	〃	E 7	〃	24.2	－	3㎜以下の砂粒を含む		頸部下位にヘラによる7条の沈線を有する。頸部は直立し，口縁部は外反しながら開く。胴部は上位に最大径がくる。
39	15－7	〃	〃	D 7	〃	15.0	－	4㎜以下の砂粒を含む		無文のやや頸部が伸びた壷である。
40	16－1	〃	〃	D 6	〃	20.0	－	3㎜以下の砂粒を含む		頸部にヘラによる沈線。大きく開きながら口縁部は外反し，端部に刷毛原体による刻み目。内面に刻み目を有する貼付突帯。
41	16－2	〃	〃	C 5	〃	22.0	－	〃		頸部にヘラによる沈線。口縁部は大きく外反する。内面に刻み目を有する貼付突帯がつく。突帯は曲って開き端部につづく。
42	16－3	〃	〃	D 7	〃	－	－	3㎜以下の砂粒を含む金雲母を多く含む		頸部に2条以上の沈線。口縁部内面に貼付突帯がつく。
43	16－4	〃	〃	C 5	〃	－	－	3㎜以下の砂粒を含む		頸部に4条の貼付突帯がつき，やや長頸気味の壷。
44	16－5	〃	〃	〃	〃	16.0	－	〃		ほぼ直立する頸部を有し，4条の貼付突帯がつく。突帯は2条が爪による刻み目がつく。口縁部は直角に曲がり，端部に刻み目がつく。1孔を有する。
45	16－6	〃	〃	D 6	〃	－	－	〃		直立する頸部を有する小形の壷。胴部に2条の刻み目を有する突帯，頸部に3条の突帯がつく。中央の突帯に刻み目がつく。
46	16－7	〃	〃	C 5	〃	－	－	〃		胴部に1条の刻み目を有する突帯がつく。
47	16－8	〃	〃	D 5	甕	19.0	－	〃	ヘラ沈3	3条のヘラによる沈線を有する如意状口縁甕。
48	16－9	〃	〃	C 5	〃	－	－	4㎜以下の砂粒を含む	ヘラ沈4	4条のヘラによる沈線を有する如意状口縁甕。
49	16－10	〃	〃	D 6	〃	19.4	－	2㎜以下の砂粒を含む	ヘラ沈6	6条のヘラによる沈縁を有する。上面が平坦な貼付口縁を有する甕。口縁端部にヘラによる刻み目。
50	16－11	〃	〃	〃	〃	26.5	－	4㎜以下の砂粒を含む	ヘラ沈6	直立する口縁に刻み目を有する貼付突帯がつき，その下に6条のヘラによる沈線が走る。
51	16－12	〃	〃	G 10	高杯	21.6	13.4	5㎜以下の砂粒を多量に含む。しかし器表では目立たず		内外面ともに剝落が著しい。口縁端部は短く外反する。
52	17－1	〃	上層	D 8	壷	20.5	－	5㎜以下の砂粒を多く含む		頸部に5条の削り出し突帯がつき，やや長頸化した壷であり，外面に2孔を有する耳状の突起がつく。
53	17－2	〃	〃	〃	〃	20.0	－	2㎜以下の砂粒を含む		頸部に6条のヘラによる沈線。口縁部は大きく外反し，端部外面に1条の沈線が走る。
54	17－3	〃	〃	G 10	〃	－	－	3㎜以下の砂粒を含む		頸部に5条のヘラによる沈線が走る。やや長頸化した壷である。
55	17－4	〃	〃	〃	〃	－	－	〃		頸部に11条のヘラによる沈線を有する。やや長頸化した壷である。
56	17－5	〃	〃	E 7	〃	17.3	－	4㎜以下の砂粒を含む		頸部に3条のヘラによる沈縁を有し，口縁部はやや短かく外反し，胴部は上位に最大径を有する。
57	17－6	〃	〃	H 10	〃	20.2	－	〃		頸部に5条のヘラによる沈線を有し，口縁部は大きく外反する。
58	18－1	〃	〃	E 7	〃	－	－	3㎜以下の砂粒を含む		頸部に8条以上のヘラによる沈線を有する。口縁部は大きく外反する。
59	18－2	〃	〃	G 10	〃	16.8	－	2㎜以下の砂粒を多く含む		頸部に4条以上のヘラによる沈線を有し，大きく開く口縁部外面にはヘラによる刻み目がつく。
60	18－3	〃	〃	〃	〃	17.5	－	3㎜以下の砂粒を含む		頸部に浅い8条の沈線を有する。口縁部は口径に比して短く，端部近くで外反する。
61	18－4	〃	〃	〃	〃	12.0	－	2㎜以下の砂粒を含む		頸部に8条の沈線を有し，大きく外反する口縁部を有する。口縁端部には斜格子状の鋭い刻み目。
62	18－5	〃	〃	D 7	〃	20.4	－	〃		大きく外反する口縁を有し，端部は肥厚し，外面は凹線気味にくぼみ，ヘラによる刻み目がつく。
63	18－6	〃	〃	H 10	〃	14.9	－	4㎜以下の砂粒を含む		やや長頸気味で，大きく開く口縁部を有し，無文の壷である。
64	18－7	〃	〃	E 7	〃	11.6	－	3㎜以下の砂粒を含む		短く外反する口縁部を有する壷で，指頭によるナデ調整が顕著。
65	18－8	〃	〃	D 7	〃	29.8	－	〃		頸部に6条以上のヘラによる沈線。大きく口縁部が開き端部外面は沈線と刻み目がつく。内面には文様化した貼付突帯がつく。
66	18－9	〃	〃	E 7	〃	－	－	〃		頸部下位に刻み目を有する2条の貼付突帯，上位に6条のヘラによる沈線，内面には少くとも2条以上の刻み目を有する貼付突帯。
67	18－10	〃	〃	D 6	〃	14.0	－	4㎜以下の砂粒を含む		頸部に鋭い11条のヘラによる沈線。外反する口縁を有し，端部には沈線上に刻み目を有する。内面には貼付突帯。対応する位置に各2孔。
68	18－11	〃	〃	G 10	〃	12.0	－	3㎜以下の砂粒を多く含む		頸部に刻み目を有する1条の貼付突帯を有する。やや長頸化した壷で，口縁部は大きく開き，内面に1条の貼付突帯がつく。
69	18－12	〃	〃	E 7	〃	12.8	－	〃		頸部に1条の貼付突帯がつく。長頸化した壷である。

表3　土器観察表（iii）

番号	挿図番号	遺構	土層	グリッド	器種	口径	器種	胎土	沈線条数	備考
70	18－13	SD8105	上層	E 7	壷	－	－	3㎜以下の砂粒を多く含む		頸部に1条の貼付突帯。肩部に4条のヘラによる沈線を有する長頸化した壷である。
71	19－1	〃	上層 中層	D 7 E 7	〃	－	－	2㎜以下の砂粒を含む		頸部に2条，肩部に1条，胴部に2条の刻み目を有する貼付突帯がつく。やや長頸化した壷である。外面はヘラによる研磨。
72	19－2	〃	上層	D 7	〃	－	－	〃		頸部上位に4条以上，下位に5条，肩部に4条，胴部に5条の貼付突帯を有する。突帯を貼付する前に沈線を走らす。
73	19－3	〃	〃	D 6	〃	22.8	－	4～5㎜大以下の砂粒を多く含む		頸部に刻み目を有する貼付突帯がつく。頸部は直立し，口縁端部は逆「L」字状の貼付口縁。
74	19－4	〃	〃	G 10	〃	－	－	4㎜以下の砂粒を多く含む		頸部に3条の刻み目を有する貼付突帯。やや長頸化した壷である。
75	19－5	〃	〃	〃	〃	－	－	1㎜大の砂粒を含む		頸部に刻み目を有する貼付突帯。肩部に6条の削り出し突帯，胴部に貼付突帯がつく。
76	19－6	〃	〃	H 10	〃	－	－	5㎜以下の砂粒を含む		頸部上位に4条の貼付突帯，下位に3条の貼付突帯がつく。
77	19－7	〃	〃	E 7	〃	－	－	2㎜以下の砂粒を含む		頸部に7条の貼付突帯を有し，突帯には浅い刻み目がつく。突帯間及び下部にヘラによる沈線が走る。
78	19－8	〃	〃	〃	〃	－	－	3㎜以下の砂粒を含む 黒色の鉱物を含む		肩部に段を有し，胴部下位に焼成後2穿孔がある。
79	20－1	〃	〃	G 10	甕	22.4	－	3㎜以下の砂粒を含む	ヘラ沈5	5条のヘラによる沈線を有する如意状口縁甕。口縁端部にヘラによる刻み目。
80	20－2	〃	〃	〃	〃	20.0	－	〃	ヘラ沈4	4条のヘラによる沈線を有する如意状口縁甕。口縁端部にヘラによる刻み目。
81	20－3	〃	〃	〃	〃	23.0	－	1㎜大の砂粒をわずかに含む	ヘラ沈4	4条のヘラによる沈線を有する如意状口縁甕。口縁端下部にヘラによる刻み目。
82	20－4	〃	〃	E 7	〃	21.0	－	3㎜以下の砂粒を含む	ヘラ沈5	5条のヘラによる沈線を有する如意状口縁甕。口縁端下部にヘラによる刻み目。
83	20－5	〃	〃	G 10	〃	21.0	－	〃	ヘラ沈5	5条のヘラによる沈線を有する如意状口縁甕。口縁端にヘラによる刻み目。
84	20－6	〃	〃	D 5	〃	－	－	3㎜以下の砂粒を含む 黒雲母らしきものを含む	ヘラ沈4 刺突文 ヘラ沈4	4条と3条のヘラによる沈線が走り，沈線間にヘラによる刺突文をもつ如意状口縁甕。口縁端部にヘラによる刻み目。
85	20－7	〃	〃	G 10	〃	26.0	－	4㎜以下の砂粒を多く含む	ヘラ沈11 刺突文	上面が平坦な貼付口縁甕。11条のヘラによる沈線を有し，その下部にヘラによる刺突文。口縁端部にヘラによる刻み目。
86	20－8	〃	上層 中層	〃	〃	24.0	－	2～3㎜以下の砂粒を多く含む	ヘラ沈11	上面が平坦な貼付口縁甕。11条のヘラによる沈線を有し，口縁端下部にヘラによる刻み目。胴部ヘラ状の器具による研磨。
87	20－9	〃	上層	〃	〃	20.6	－	3㎜以下の砂粒を含む	ヘラ沈4 山形文 ヘラ沈2	上面が平坦な貼付口縁甕。4条と2条のヘラによる沈線間にヘラによる山形文が施される。
88	20－10	〃	〃	E 7	〃	18.3	－	〃	ヘラ沈6 ヘラ沈2	非常に薄く，短い口縁部を有し，6条と1条の間隔をおいたヘラによる沈線が走る。
89	20－11	〃	〃	〃	〃	15.0	－	〃	無	上面が平坦な貼付口縁甕。内外面とも指頭によるナデ調整。
90	20－12	〃	〃	G 10	〃	35.3	－	3㎜以下の砂粒を多く含む	ヘラ沈12	断面が三角形の貼付口縁。12条のヘラによる沈線を有する。8条／㎝の刷毛目及び研磨。口縁端部にヘラによる刻み目。
91	21－1	〃	〃	D 7	〃	24.0	－	3㎜以下の砂粒を含む	無	断面が三角形の貼付口縁。口縁端部にヘラによる刻み目。胴部は研磨。
92	21－2	〃	〃	G 10	〃	20.0	－	3㎜以下の砂粒を多く含む	無	断面が三角形の貼付口縁。口縁端部にヘラによる刻み目。
93	21－3	〃	〃	〃	〃	48.6	－	3㎜以下の砂粒を含む	ヘラ沈12 刺突文	断面が三角形の貼付口縁。口縁端部は沈線の上にヘラによる刻み目。12条のヘラによる沈線が走り，その下部には刺突文。
94	21－4	〃	〃	D 6	〃	21.1	－	1～2・3㎜大の砂粒を多く含む	ヘラ沈10	断面が三角形の貼付口縁。口縁端部はヘラによる刻み目。10条のヘラによる沈線を有する。
95	21－5	〃	〃	D 7	〃	25.0	－	5㎜以下の砂粒を含む	櫛描21 刺突文	上面が平坦な貼付口縁。口縁端部はヘラによる刻み目。21条の沈線が走る。数条を単位とする櫛を使っている可能性。
96	21－6	〃	〃	〃	〃	－	－	3㎜以下の砂粒を含む	櫛描24	4条を単位とする櫛を用いた沈線が24条走る。口縁部の形態は不明。
97	21－7	〃	〃	〃	〃	17.2	－	〃	ヘラ沈7	直立する口縁下部に貼付突帯を有する。突帯及び口縁端部にはヘラによる刻み目が施され，胴部に7条のヘラによる沈線。内外面ともにヘラによる研磨。
98	21－8	〃	〃	G 10	高杯	24.0	－	3㎜以下の砂粒を多く含む		口縁部が外反する。SD8105　中層，出土の高杯（16―12）より口縁部は明確で長い。
99	21－9	〃	〃	〃	蓋	23.0	11.3	4㎜以下の砂粒を含む		甕の蓋である。口縁端部は肥厚し，内外面ともにヘラによる研磨が施される。
100	21－10	〃	〃	E 7	〃	8.3	－	2㎜以下の砂粒を含む		壷の蓋で，中央部は中空である。頂部は盛り上がる。

中の池遺跡発掘調査概要

—香川県丸亀市金倉町所在の
弥生時代遺跡の調査—

1982年3月31日 発行

発行 丸亀市教育委員会
丸亀市大手町2－1

印刷 久郷印刷有限会社
丸亀市福島町84番地